大正日本の『ルバイヤート』（続）

杉田英明

［目次］

一　竹友藻風譯『ルバイヤット』
二　小川忠藏の評釈
三　厨川白村の『ルバイヤート』への関心
（1）厨川辰夫・矢野禾積編『十九世紀後半期英詩選』
（2）新村出と「南番文字」
四　矢野峰人「RUBAIYAT の研究」
五　『ルバイヤート』への言及
（1）高田半峰の講演
（2）宮澤賢治と保阪嘉内
（3）徳冨蘆花『日本から日本へ』
六　映像と絵画
（1）映画の輸入
（2）雑誌『地上巡禮』表紙

一　竹友藻風譯『ルバイヤット』

荒木茂の原典訳が発表された翌一九二一年の三月には、英文学者竹友藻風（たけともそうふう）（本名は虎雄（とらお）。一八九一―一九五四年）訳によるオオマア・カイヤム『ルバイヤット』が〈アルス泰西名詩選〉の第一冊としてアルスより刊行されている。これは、フィッツジェラルド Edward FitzGerald（一八〇九―八三年）英訳の第二版（一八六八年）全百十首を文語定型詩に全訳した上で「解題」と「解説」を付した袖珍本である。装幀と扉絵は恩地孝四郎（一八九一―一九五五年）が担当、ギルバート・ジェイムズ Gilbert James（一八六五―一九四一年）による挿絵八点が添えられている。この翻訳はのちに新潮社の世界文學全集37『近代詩人集』（一九三〇年五月）の「英吉利詩篇」に収められて人口に膾炙し、さらに戦後の一九四七年八月には改訂版が京都の西村書店から刊行されたの

ち、還暦記念出版の『譯詩集　法苑林』（潮人社、一九五一年十一月）にも収録された。

藻風は大阪の出身、同志社神學校から上田敏（一八七四―一九一六年）を慕って京都帝國大學英文學科の選科に入学し、卒業後はコロンビア大学大学院でアースキン John Erskine（一八七九―一九五一年）に師事。修士号を得て帰国した後、東京高等師範學校、東京文理科大學、關西學院大學、大阪大學などで教鞭を執った。詩人として、第一詩集『祈禱』（昴發行所、一九一三年七月）以降数冊の詩集を刊行する傍ら、『ヱルレエヌ選集』（アルス、一九二一年六月）、『希臘詞花抄』（新しき村出版部、一九二四年八月）、『神曲』（全三冊、創元社、一九五〇年二―八月）など多くの翻訳や、『Nursery Rhymes（英國童謠集）』（研究社英文譯註叢書第十、一九二九年一月）をはじめとする訳注の仕事でも知られている。[1] 東京高等師範で同僚だった福原麟太郎（一八九四―一九八一年）の回想によると、「上田敏先生の薫陶を受けたのは渡米前で、十七、八歳ごろから先生にその詩才を認められ、やがて京都大学英文学の選科生として先生に接し、「自分が上田敏の最高弟であることを信じ、先生の衣鉢をつぐものは自分であるとしていた」ので、服装から趣味、文章に至るまでそっくり真似るほど「上田敏に徹頭徹尾私淑していた」[2]という。同じ英文科の出身で上田敏の『ルバイヤート』講義に列した矢野峰人（本名は禾積。一八九三―一九八八年）は藻風とは二歳違い、「入れ違いに大学に入ったので、学窓で直接相識る機会を得なかった」[4]と回想しており、藻風が同じ内容の講義を聞いたかどうかは判らない。少なくとも、『ルバイヤット』の「解題」のなかで敏の言葉を引用している[5]以外、彼自身はこの翻訳と敏との繋がりに直接は言及していない。

藻風訳は、英文学の専門家による初めての学術的かつ藝術的な日本語訳と評するのが適当であろう。「解説」において、底本としたフィッツジェラルドの第二版については、ヘロン＝アレン Edward Heron-Allen（一八六一―一九四三年）の注釈[6]を随所で参照すると同時に、初版（一八五九年）・第三版（一八七二年）・第四版（一八七九年）との異同にも目配りしている。ジェイムズの挿絵は、初版本文に基づくラウトレッジ書店のグラビア印刷版[7]を手許に置いて利用したのであろう。アルス版の『ルバイヤット』刊行から四年後には〈Kenkyusha English Texts〉として竹友虎雄（ママ）『Victorian Poets』（研究社、一九二五年三月）を、その翌年には、〈研究社英文學叢書〉の一環として『Longer English Poems』（研究社、一九二六年十月）を刊行、いずれにもフィッツジェラルド訳初版本文を収め、全歌に亘って詳細な訳注をそれぞれ英語と日本語で施している。後者の参考書目に挙げられたニコルソン注釈版[8]やバットソン注釈版[9]、ホワインフィールド英訳[10]やニコラ仏訳[11]、グロルロー仏訳[12]など多くの注釈書・原典訳は、とくにこの注釈のために入手したものと思われる。

戦後の西村書店版の「はしがき」で藻風は、

大正十年アルス書房から刊行した小著『ルバイヤット』は青春の客氣に任せ、殆んど一氣呵成に譯を了つたものであつ

たから、さまざまの點に於いて意に滿たないものが多く、字句の解釋などについても冷汗を覺えるやうなところがあつた。その一方、さすがに若い時でなければかうは書けなかつたであらうと思はれるやうなところもあつて、愛着をつないでゐたのであるが、この度、全體に亙つて改訂を加へることが出來たのはこの上もない幸福である。

と述べているが、実際にはアルス版との異同はそれほど多くはない。[13] 彼自身もアルス版をそれなりに会心の作と見做していたのではないだろうか。ちなみに、西村書店版の口絵に掲げられたギルバート・ジェイムズの挿絵は、アルス版とは異なり、『Longer English Poems』の訳注の準備過程で入手したと思われるニコルソン注釈版から採られている。[14]

ここで藻風訳の見本として、第12歌と第8歌を掲げてみよう。

ここにして木の下に、いささかの糧、
壺の酒、歌のひと卷、——またいまし、
あれ野にて側にうたひてあらば、
あなあはれ、荒野こそ樂土ならまし。

Here with a little Bread beneath the Bough,
A Flask of Wine, a Book of Verse — and Thou
Beside me singing in the Wilderness —
Oh, Wilderness were Paradise enow ![15]

バビロンとナイシャプウルをわれ問はず、
さかづきは苦くとも、あまくともあれ、
命の酒は雫ひまなく浸みやまず、
命の葉、ひと葉ふた葉と落ちやまず。

Whether at Naishâpûr or Babylon,
Whether the Cup with sweet or bitter run,
The Wine of Life keeps oozing drop by drop,
The Leaves of Life keep falling one by one.[16]

いずれも、ほぼすべての原語を取りこぼさずにその順番のまま訳語に対応させた、きわめて正確な訳詩になっている。しかも第12歌では「いまし」「ならまし」、第8歌では「問はず」「やまず」「やまず」と行末が韻を踏んでいる。音数はそれぞれ「五五七・五七五・五五七・五五七」「五七五・五五七・七七五・五七五」と、各行が五音と七音の厳密な三部構成であり、この形式は全歌を通してほぼ変わらない。この「五七」を基調とする音構成について、土居光知（一八八六—一九七九年）は「竹友氏の譯詩ルバイヤットを讀みて」[17]のなかで次のように評している。

この詩の如き五音脚詩の一行にもれる内容は七五の一行に盛りきれないものであつて、強いて七五調に譯さうとすると内容を省略しなければならなくなる。また七五を二つ重ねた

一行に譯さうとすれば譯詩の方が稍長くなつて緊縮した感じを失ふことになる。（中略）

竹友氏は一行を七五、八七の如き二つの sound groups から成立せしめる代りに、五五七及び五七五の如き三つの sound groups から成立せしめた。原詩に於いて特に美くしく感じられるのは表現の透明さ、澱みなく、濁りなき、すつきりした男性的な調子であるが、氏が感傷的になりやすい七五の調子からでなく、五七の調子を出發點とし、その前か後かに五音を加へて創始した詩形はこの美を移すのに最も適切であることを感じる。Fitzgerald[18] の詩がそれ自身の價値をもつてゐるやうに、この譯詩も內在的な價値を有することを感じ、英譯者の心にもかなひさうな日本譯として私はこれをよろこぶうちの一人である。

蒲原有明（本名は隼雄。一八七五―一九五二年）の訳詩「歌の一巻樹のもとに、／美酒の壺、糧のやま、さては汝が」[19]に見られるように、明治の新体詩の基調が七五調であったのに対し、藻風訳は五七を基調に据え直すことによって、フィッツジェラルドの原詩の表現と内容に見合った日本語表現を生み出すことに成功したというのが土居の評価である。森亮（一九一一―九四年）も戦後、「五五七調のもつ回転の悪さが、これらの思想詩に重厚な味を与えている」[20]と肯定的に回顧している。

他方、表記の点では、第12歌の例からも窺われる通り、原詩のダッシュ（—）は訳詩では二倍ダッシュ（——）にほぼ対応させて厳密を期している。また、たまたま右の二例には含まれていないが、第6歌の「『酒、酒、酒、／赤き酒よ』」“Wine! Wine! Wine! / “Red Wine!” を始め、原詩の二重引用符は二重鍵括弧に置き換えているほか[21]、第7歌の「「悔」Repentance[22] や「「時の小鳥」」The Bird of Time のように冒頭が大文字表記の単語や、第27歌の「「今日」」To-day,「「明日」」To-morrow のように小頭文字（スモール・キャピタル）を使用している単語、第32歌の「「如何なれば」」*Why*,「「何處より」」*Whence*,「「何處へ」」*Whither* のごとき斜体の単語にしばしば鍵括弧（「　」）を付しているのも、従来の翻訳にはあまり見られなかった新しい特徴である[23]。

訳語について見ると、古語・雅語を自由に使いこなしている点が何より目につく。「ここにして」は他に例を見ない表現で、五音にする必要上「ここに」に「して」を追加したのであろうが[24]、意味は明瞭である。それ以外の「いまし」Thou,[25]「あなあはれ」Oh,[26] 反実仮想の助動詞「まし」were,[27] 逆態の仮定条件を示す助詞「とも」Whether . . . or,[28] 絶え間がないことを意味する形容詞「ひまなし」keeps[29] などは、多くが『古事記』『萬葉集』などにまで溯ることのできる表現である。これらは、藻風の文語訳全体に格調を添える大きな要素になっている[30]。

誤訳の類はきわめて少ない。第97歌で原語の “Porter” を “Potter” と誤読して「瓶つくり」と訳した点は、第四刷刊行後に読者からの指摘を受けて新聞紙上に訂正記事を出している[31]。また第47歌では、

おそれざれ、「存在」の汝が記録を
伏せて後、失ふや、文字知らずやと。
うたかたのいくよろづ、かの器より
とこしへのサアキは注ぎぬ。注ぎやまず。[32]

And fear not lest Existence closing *your*
Account, should lose, or know the type no more;
The Eternal Sáki from that Bowl has pour'd
Millions of Bubbles like us, and will pour.[33]

と、原詩二行目の“the type”を「活字」の意味に取って「文字」と訳している。しかし、イスラムでは人間の運命は天の書板に筆（al-qalam）によって記されると考えられているので、「活字」とする解釈には無理がある。また、対応する第三・四版の第46歌がここを“the like”と修正していることからしても、“the type”とは「（お前と同じような）型、種類」すなわち人間一般と理解すべきであろう。後半二句で語られるように、「とこしへのサアキ」すなわち神は人間を泡のように次から次へと生み出し続けるので、お前が死んだのちに人間が死に絶えるなどと心配するには及ばない、と述べ、神の永遠性と人間のはかなさとを対比するのが全体の趣旨と思われる。こうした類の誤訳は他にもいくつか見られる。[35]

他方、五七調に収めるために説明を削ってしまい、意味が取りにくくなっている訳詩も存在する。第63歌を例に挙げよう。

この水を神に生るとせばいかに、
えびかづら誰か係蹄とは瀆しえむ。
祝福なり、用ゐざらめや、呪詛にて
ありとせば、――そこに入れたる者や誰。[36]

Why, be this Juice the growth of God, who dare
Blaspheme the twisted tendril as a Snare ?
A Blessing, we should use it, should we not ?
And if a Curse — why, then, Who set it there ?[37]

「酒が神の育てたものであるならば、葡萄の巻き蔓が人間を堕落させる罠だなどと言って誰が神を冒瀆できようか。神の祝福として我々はこれを享受すべきではないのか。もしそれが呪いだとするなら、誰がそれを存在せしめたと言うのか（神であるとすれば、それは神への冒瀆である）」というのが一編の趣旨である。[38]第一行の“be”は仮定法現在（Subjunctive Present）ないしは命令法で“if this juice be the Growth of God”の意味、“Why”は条件の帰結を導いて「それなら」といった心、“A Blessing”は“it”の同格補語で“As a Blessing”と同義であろう。この訳詩はすべての行の音数が五・七・五という整った形式で構成されている。しかし内容上は、「この水」が酒であることや、「えびかづら」が葡萄を指すことなど、説明注がないと読者には読み取りにくい。一行目の「いかに」は間投詞“Why”に対応するのかもしれないが、

日本語としては繋がりが判然としないし、三行目の「祝福（めぐみ）なり、用ゐざらめや」はあまりに簡略化しすぎて文脈を摑みにくい憾みがある。こうした言葉足らずや誤解を招きやすい訳詩は他にもいくつか存在する。[39]

他方、先に触れた通り、巻末「解説」において、多くの歌について主としてヘロン＝アレンに依拠した訳注を付して読者の理解を助けているのは、藻風訳の学術的側面をよく示している。『Longer English Poems』の訳注を経て、西村書店版では「註」はさらに詳細になってゆく。また「補遺」では「ルバイヤット」に用ゐた言葉にはシェイクスピイアの影響が認められる」として、いくつかの典拠を挙げているのも、[40]訳者の英文学の学識を示す点で特筆すべきであろう。

藻風訳を全体として見ると、問題点はいくつか指摘できるものの、きわめて高水準の出来栄えであることは疑問の余地がない。読者に与えた影響も大きく、評価も高かった。後年、藻風の詩集『石庭』（私家版、一九三八年三月）の装幀を手がけることになる壽岳文章（じゅがくぶんしょう）（一九〇〇―九二年）は、「恩地孝四郎の装幀になるこの袖珍本は、当時私の愛蔵書であり、愛読書であった」[41]と記し、批評家で『ルバイヤート』蒐集家でもあった谷澤永一（たにざわ）（一九二九―二〇一一年）も、「最初に小遣いを少し無理して購入したのが、袖珍本『アルス泰西名詩選』1の竹友藻風訳『ルバイヤット』（中略）、即ち『世界文学全集』収録の原本である」[42]と、蒐集の原点に本書が存在したことを回顧している。慶應義塾で一時同僚として教え、のちまで親交のあった西脇順三郎（一八九四―一九八二年）が「彼の残した作品として後世に傳えたいものはダンテの「神曲」と彼がまだ若かつた時に訳した「ルバイヤト」であると思う」[43]と評していることからも、藻風の全業績のなかで『ルバイヤット』が占める重要な位置が窺えよう。ただ一方では、その訳を痛烈に批判し、一九三六年二月に京城で私家版『波斯古詩留盃邪士』を刊行した堀井梁歩（本名は金太郎。一八八七―一九三八年）のような反骨の文人の存在も忘れるべきではないかもしれない。[44]

藻風は本書の三年後に刊行した『希臘詞花抄』で、フィッツジェラルドがペルシア語原詩を創造的に意訳した手法を踏襲している。全三部から成るこの訳詩・創作詩集の第一部「希臘詞花抄」は、主として『ギリシア詞華集』*Anthologia Graeca*（の英訳）から選んだ三十編ほどの訳詩を収める。その序文で藻風は、

> ここに收めたる數十章はもとよりその飜譯にはあらず。詞花集を繙きながら、遙かにわが心より浮び出でたるおもかげを捉へたるのみ。フィッツジェラルドが波斯詩人の詞想を移したる神工の迹には似るべくもなけれどその志に於いて或は近きものならむ。（中略）かかる類（たぐひ）の文學も存在を許さるべきことを思ひて希臘詞花抄と題す。[45]

と述べ、実際、訳詩の多くに「ペルセス（前四世紀）のうたの意を述べたり」「メレアゲル（前一世紀）のうたの意に從へり」といった言葉を添えると同時に、末尾の六編を除くすべての詩を、

原詩の行数に拘わらずルバーイーに倣って四行にまとめている。そのうちの一編、「幼兒の死」と題された作品を例に引いて、その訳しぶりを窺っておきたい。

わがこころ憂に染まぬいつとせの秋、
無惨なる死の手に依りて果敢なくなれり。
泣くなかれ、人の世の幸はなくとも、
しかすがに小さきなやみをわれは知る。
ルウキアノス（年代未詳）のうたの意を述べたり。[46]

ここでも『ルバイヤット』と同様、五七の音数を基本とし、その前後に五または七音を加えた定型文語訳が採用されている。「しかすがに」は『萬葉集』に見られる古語で「それはそれとして」「そうは言うものの」を意味する。[47] ギリシア語原文は『ギリシア詞華集』第七巻（墓碑銘）第三百八番の四行詩であろう。[48] 藻風が依拠したと思われるバトラー Alfres Joshua Butler（一八五〇―一九三六年）のギリシア語との対訳 “A Child’s Death” では、

At five years old — my heart all free from care —
Death laid his hand upon me pitiless.
Mourn not: of life I had but little share,
Yet had I little part in life’s distress.[49]

としている。英訳ではカッリマコス、ハーデースといった固有名詞は捨象されているものの、藻風は「憂に染まぬ」free from care,「いつとせ」five years old,「無慙なる死」Death . . . pitiless,「泣くなかれ」Mourn not for me などを訳語に生かしながら、英訳をかなり忠実に再現している。ただ、原詩や英訳の後半では「この世に生きた時間が短かっただけ現世の悪に染まることも少なかったのだから、私のことを嘆かないでくれ」と歌っているのに対し、邦訳では「生きた時間は短くとも、それなりに悩みはあったのだ」という形に読み解かれているので、「泣くなかれ」との関係が曖昧になっている憾みはある。

もう少し自由な訳しぶりが見て取れる例としては、「蘆」「水」の二編を挙げておこう。

静かなれ、野も山も音をひそめよ、
牧羊の神ぞいま蘆の笛吹く。
白雲は大空の胸になづさひ、
夕ぐれの水冴えて魚も沈めり。
プラトオン（前五世紀）のうたにこれに似たるものあり。

あけがたの水のおもてのきらめくは、
ニュンフェらの舞の素足の跳るなり。
夕ぐれに水のおもては冴えわたり、
そこはかとうつすらむ、白きただむき。[50]

音数上の特徴は「幼兒の死」と同様である。「なづさふ」は「慣れ

親しむ[51]」、「ただむき」は「腕[52]」、「ニュンフェ」Nymphē はいわゆる「ニンフ」、藻風自身の注記を借りれば「野山の精[53]」を意味する。これらは、『ギリシア詞華集』第九巻（修辞的エピグラム）の第八百二十三番[54]を二つに分割した四行詩と思われる。バトラーの訳 "Pan Piping" は、次の通りである。

Be still, ye wooded cliffs and waterfalls
And mingled bleatings from the murmuring meads !
For Pan with sweetly ringing music calls,
Laying his lip on pipe of bounded reeds:
And round him, dancing swift with glimmering feet,
Nymphs of the forest and the fountain meet.[55]

両者を比較すると、「蘆」の前半「靜かなれ……笛吹く。」と、「水」の二行目「ニュンフェらの舞の素足の跳るなり。」以外は、英訳に対応する文言が見られず、「あけがた」「夕ぐれ」といった時間の観念を含め、藻風自身が原詩の田園詩風の情景に触発されて生み出した想像上の空と水の映像であることが判る。ここでは、フィッツジェラルドが二つの詩を合成したり、文言の一部から新たな詩句を生み出したりした方法を踏襲していることになる。本書は、藻風の詩心がフィッツジェラルド訳と出会った副産物として生まれた作品と評してよいであろう[56]。

二　小川忠藏の評釈

大正から昭和初期にかけては、英語・英文学の学習者を対象にしたフィッツジェラルド訳の注釈がいくつか発表されている。その先蹤となったのが、受験雑誌『英語の日本』に一九一六年十月から一九一七年十月まで、計十五回に亘って連載された小川忠藏「Rubaiyat of Omar Khayyam『ルベェアット評釋[57]』」である。小川は当時神戸高等商業學校教授[58]で、『和文英譯並例題 Japanese-English Translation』（寶文館、一九〇九年十月）や『ナショナル練習讀本 National Readers with Exercises』第一部（寶文館、一九一四年九月）などの英語教育関連の著作を上梓、後年は『産業心理學』（寶文館、一九三〇年一月）、エッチ・エム・ヴァーノン／小川忠藏譯『産業疲勞と能率』（大同書院、一九三一年六月）といった実務関係の著述・翻訳も行なっている。

評釈の底本については記載がないが、フィッツジェラルド訳第五版である。一回に三歌から五歌程度を取り上げ、全百一歌中の第六十一歌まで及んでいる。ただし、英語学習者向けの講義という性質もあってか、原文の記号類や綴り字などはあまり正確には復元されておらず[59]、各歌三行目冒頭の一字下げも無視されている。単純な誤植も含め、原文の単語や綴り字自体が間違っている箇所も見られるが[60]、韻律を問題にするのでない限り、いずれも解釈自体に影響を与えるような性質の誤りではない。

連載第一回の「緒言」において評釈者はまず詩人とその作品について簡単な紹介を行ない、ウマルの「享樂主義」は「豚の

溷濁(こんだく)中に假睡して萬望此所に果し得たりとするのとは天地の差異がある、精選閑雅なる享樂主義である」「其大悟の徹底せる、其達觀の宏大なる、吾人之れを讀んで痛快と叫ばざるを得ない。余は英語の日本讀者に之れを紹介したく思ふのである」と述べている。たんなる英文解釈というよりは、そこに見られる思想を青少年のための人生訓として提示しようとする傾向が講義全体を通じて見られるのは、小川がのちに本務校で英語のみならず「修身」をも担当することになる事実を併せ考えると興味深い。難解な韻文をあえて教材に取り上げた意図も窺われよう。

例によって、連載第四回に含まれる第12歌の「譯」と「註」を見本として掲げよう。

詩書を枝に掛け
一瓢の酒、一魂(ママ)のパンと
沙漠に歌ふ汝とだにあらば
沙漠は正に天國たるに足る

【註】 十二節は十一節の意を受けて其沙漠にて詩の本を樹下に開き傍に一瓶の酒と一魂(ママ)のパンと且つ我が傍に歌歌ふお前とだにあらば、此沙漠は天國であると云ふなり、お前と云へるはOmarの情人を指して云へるなり、此三者さへあらば已(ママ)が願望悉く成就し福德無量の帝王の幸と異る所なしと云ふなり、一瓢の酒と一魂(ママ)のパンとは奴隷の一日の食物なり而かも足るを知る者には之れを以て帝王の幸福を經驗し得るなり、故に奴隷と帝王と其懸隔を失し、マホメッドの權威をすら羨む人なしと云ふを得べし、**Wilderness were Paradise enow !** **enow** は enough の古字、**were Paradise** は would be Paradise とすべきを were とせるなり

尙ほ情人と云ひ酒と云ふ皆理想的の佳人又理想的に己れを忘れて耽溺し得る處のものを指して云ふにて現實に耽溺するものと解すべからず。

一行目の「詩書を枝に掛け」は、書物を衣服か布のように扱っている点で、“A Book of Verses underneath the Bough”の訳として適切とは言えないだろうが、その他の訳文は正確である。「魂」は「塊」の誤植であろう。

「註」は、直前の第11歌の後半「奴隷とスルタンと其懸隔を失し／マホメッドの權威をすら羨む人もあるなし」Where name of Slave and Sultán is forgot —/ And Peace to Mahmúd on his golden Throne![61] にも言及する形で記される。これら両者は共通の源泉(ボドレー写本第百四十九番および百五十五番)から生まれたとされているので[62]、こうした扱い自体は適切であろう。ただし、“Mahmúd”を「マホメッド」——第11歌の「註」では「マホメッド教主」「マホメッド王」——すなわち預言者ムハンマドとしたのは正確ではない。ここはフィッツジェラルドが第60歌への注で暗示しているように、ガズナ朝のスルタン・マフムード Maḥmūd Gaznavī(在位九九八—一〇三〇年)とすべきところである[63]。他方、「汝」

を「Omar の情人」すなわち女性と取るのはこれまでの多くの訳者や、欧米の画家たちの解釈に沿った見方、また、“were”を仮定法とする語学的な説明は、学習者にとって有益である。最後の「尚ほ」以下の道学先生風の一文には、小川の教育者としての配慮が見て取れる。

筆者はおそらくフィッツジェラルドの第五版以外の本文や、関連する注釈書は参照しておらず、その結果として語学上の解釈[64]や思想的背景に関する説明[65]に不適切と思われる箇所も散見される。また後年、その訳が「およそ抒情詩とは無縁の、砂をかむような文語体[66]」と評されたこともある。それでも、外国人読者にとって判りにくい韻文表現に文法的な説明を加える試みはかつて行なわれたことがなかったので、この評釈は歴史的な意味を持つと言えるであろう。

三　厨川白村の『ルバイヤート』への関心

（1）厨川辰夫・矢野禾積編『十九世紀後半期英詩選』

竹友藻風訳の出たちょうど一年後の一九二二年三月に、英文学者の厨川白村（本名は辰夫。一八八〇―一九二三年）と矢野峰人との共編で『The Later Nineteenth Century Poets』（奥付の邦題は「英詩集」）が大阪の積善館から刊行されている。これは、標題の範囲に含まれる詩人四十七名を選んでアルファベット順に並べ、それぞれの代表作を掲げた上で、英語による略伝と簡単な語注とを付した教科書である。その序文（Preface）によれば、従来十九世紀後半に特化した詞華集が存在しなかったことに鑑み、学校の教師や学生のみならず、英詩に興味を持つ一般読書人をも念頭に置いて、京都帝國大學のエドワード・クラーク Edward Bramwell Clarke（一八七四―一九三四年）の助力を得つつ編集されたという。そのなかにフィッツジェラルドの『ルバイヤート』第五版からの抜粋[67]も含まれているのは、この作品の愛読者であったクラーク[68]の意見も反映されているのかもしれない。白村自身は、一九〇一年秋に東京帝國大學文科大學英吉利文學科に入学しているので、一九〇二年に行なわれたラフカディオ・ハーン Lafcadio Hearn（小泉八雲。一八五〇―一九〇四年）の二度目の「エドワード・フィッツジェラルドと『ルバイヤート』」講義[69]を聴講した可能性がある。同じく師事した上田敏の影響も当然あったことだろう。白村自身は京都帝國大學教授として、一九二二年度に「第二講読（1）Victorian Poetry（Edward Fitzgerald[68], Browning, D. G. Rossetti, Francis Thompson[70]）」を担当しており、そこで『ルバイヤート』の訳読も行なわれたものと思われる。

後年、『ルバイヤート』の蒐集家となり、自らも数種類の邦訳を上梓することになる矢野峰人は、本書に関連して次のように回想している。

> その（『ルバイヤート』の）異訳蒐集を思ひ立つたのは大正十年頃からの事であらうか。おそらく、その前年頃から、厨川白村先生と『十九世紀後半期英詩選』と題する教科書風の詞華集を編纂してゐた時、先生担当の「ルバイヤート」抜萃の

註に、ホインフィールドとかガーナーとかの英訳を引用してあるのを見て、急に英訳に興味をおぼえるやうになつたのが動機であらう。[71]

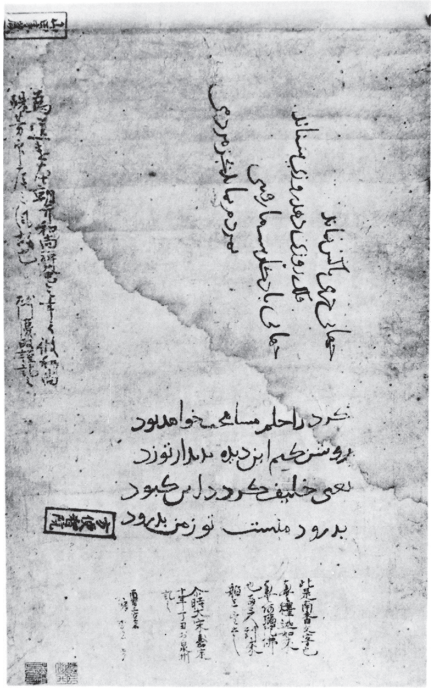
この文章から、フィッツジェラルドの章を担当したのは白村であったことが判る。当時の峰人は眞宗大谷大學教授で、翌四月より第三高等學校講師を兼任する予定であった。[72] 引用文中の「ホインフィールド」Edward Henry Whinfield（一八三六―一九二二年）はすでに挙げたペルシア語原文と英訳との対訳本の著者、[73]「ガーナー」John Leslie Garner（一八六二―一九二五年）もペルシア語原典（ニコラ版、ホワインフィールド版その他）からの直接訳を刊行している東洋学者だが、実際に引用されているのはこのガーナーではなく、竹友藻風訳でも参照されていたバットソン注釈本である。[74][75] 語注はあまり多くはないものの、主としてイスラム世界独自の用語（Caravanserai, Muezzin, Ferrásh, Sáki, Alif, from Máh to Máhi）や固有名詞（Jamshyd, Bahrám, Mahmúd）に付され、類似の発想を含む漢詩も引用されている。[76] 提示された本文がやや正確さを欠き、単語の脱落や誤記のほか、句読点、[77][78] 記号類、[79] 文字表記等に関する不備がしばしば見られるのは教科書としては問題であろう。[80] それでもこうした詞華集の形で、フィッツジェラルド訳の本文が同時代イギリスの他の詩人の作品と並んで提示され、文学史のなかに位置づけられ、読者が親しむ機会を増やした点では、本書にもそれなりの意味があったと見るべきである。

（2）新村出と「南番文字」

白村が『ルバイヤート』に寄せた関心については、京都帝國大學の同僚だった言語学者の新村出（しんむらいずる）（一八七六―一九六七年）の追悼文中に次のような証言がある。

數年前の夏のことであつたが、英文學科を卒業する學生某君がオーマル・カイヤムの四行詩篇（ルバイヤット）を論文に提出したとき、私も驥尾に附して陪査の任に當つたことがある。（中略）間もなく暑中休暇が來た。（中略）一夕納凉氣分でぶらりと閑談に來られ、軒さきに岐阜提燈をつるした椽がはで四行詩篇（ルバイヤット）の話などがあつた。私は羽田博士が今より十數年前に考證された南番の古詩篇の出典の尙不明であることを語り、もしやオーマル・カイヤムの四行詩篇（ルバイヤット）の中にでも見出されたらば興味が一段と深からうと附加へた。（中略）白村君はそれから私のために一とほり調べてくれられたと見えて、その後どうもオーマル・カイヤムには出てゐないと報ぜられた。こんなことも今は一夢となつたのだ。[81]

「南番の古詩篇」とは、高山寺方便智院旧蔵の「紙本墨書南番文字 一巻」（縦三二・七×全長五〇・〇センチメートル。一九三四年一月三十日重要文化財指定[82]）を指す。これは『閑居友（かんきよのとも）』の著者として知られる天台僧・勝（證・澄・照）月房（坊）慶政（けいせい）（一一八九―一二六八年）が栂尾（とがのお）の明恵（みようえ）（高辨。一一七一―一二三二年）に贈ったと



図版 1　紙本墨書南番文字（横長とされる文書を時計回りに 90 度回転して掲載）

される、ペルシア詩が記された文書である（**図版 1**）。慶政の書き付けには、

此れは是れ南番文字なり。南無釋迦如來、南無阿彌陀佛なり。兩三人到來し、舶上之を書くことを望む。

尒時大宋嘉定十年丁丑。泉洲に於いて之を記す。

本朝の弁和尚の禪菴に送遣する爲に之を書かしむ。彼の和尚は殊に印度の風を芳しとする故なり。砂門慶政謹みて之を記す。

（原漢文）

とし、さらに「南番三寶名（後略）」とも添えてある。「尒」は「爾」の異体字で、「尒時」とは「当時」「そのとき」の意味。すなわち南宋の嘉定十年（西暦一二一七年）、慶政が留学先から帰国のさい、泉州の船上で二、三人の異邦人と出会ったので、仏教の故地・印度を慕う明恵上人に贈るために「南番文字」で「南無釋迦如來、南無阿彌陀佛」に当たる経文、ないしは佛・法・僧の「三寶名」を書いてもらったというのである。

この文書に最初に着目し、一九〇九年、書かれた文字がペルシア語であることを発見して解読・発表したのが、若き東洋史家で京都帝國大學文科大學講師の羽田亨（一八八二―一九五五年）[83]であった。「羽田博士が今より十數年前に考證された」と新村出が記すのは、十月三十一日の史學研究會における羽田の講演と、それをもとにした論考「日本に傳はれる波斯文に就て」[84]を指していよう。この論考中ではペルシア詩のローマ字転写と、リチャードソン John Richardson（一七四〇／四一―九五年）の『ペルシア語・アラビア語・英語辞典』[85]に拠った英訳とが掲げられているのみだが、十二月二十五日付けで文書の所蔵者・山田永年のために記した「南番文字文書解説」には次のような和訳が付されている。

一、（上方の四句）

世の歡樂は永續するものに非ず　天は今日歡樂を與へ明日は之を奪ふ　世界は記録なり吾等は之と別れざる可らず　殘存するものはたゞ功業のみ

二、（下方の四句）

英雄は溫雅と慈悲とを持つならん　願はくは速やかに其の

顔容によりて我が眼を輝かしむるを得ん　我が友は我が眼を青くせり（青は悲哀の色）　これ我が告別の言葉なり　汝に致せる我が告別の言葉なり[86]

羽田は詩の出典や韻律までは突き止められなかったが、これらが「四行詩」であるとは一言も記していない。ただ、二つの詩句とも四行表記になっているため、新村出をはじめ後世の人々が「四行詩」と考えたとしても無理はない。厨川白村がこれに関心を抱き、ウマル・ハイヤームの『ルバイヤート』中に典拠を探し求めたのもまた当然であっただろう。

その後、何人かの研究者が詩の読解を試みているが[87]、最終的に「上方の四句」の二句ずつの典拠が、それぞれペルシア古典文学の専門家である岡田恵美子[88]（一九三二年生）と黒柳恒男[89]（一九二五―二〇一四年）の調査によって明らかになったのは、一九七〇―八〇年代に入ってからのことである。

jahān-ē khorramī bā kas na-mānad
falak rūzī dehad rūzī setānad
jahān yādgār-ast mā rafṭanī
be-mardom na-mānad be-joz mardomī

喜びの世は誰とともにも留まることなく、
天はある日（それを）与えてある日奪い去る。
世は思い出にして我らは去るべき身、
善行のほか人には何も留まらない。

前半二対句はグルガーニー Fakhr al-Dīn As‘ad Gurgānī（一〇七三年頃歿）の恋愛叙事詩『ヴィースとラーミーン』*Vīs va Rāmīn* の第八十一章「友人からの冷遇に関する第五の手紙」[90]、後半二対句はフィルダウスィー Firdawsī（九三四―一〇二五年）の英雄叙事詩『王書』*Shāh-nāma* のゴシュタースプ王の巻[91]に見出される。両者は韻律が異なるが、「世」jahān,「留まらない」na-mānad という共通する単語を含むために並置され、あたかもルバーイー（四行詩）のような形を呈している。羽田亨の解釈は現代から振り返っても、きわめて正確だったと言えるだろう。

これに対し、下方の四句はルバーイーと見做しうるが、ペルシア文字の書体が乱れて複数の解釈を可能とするばかりか、韻律を正確に整えるためには多少の字句の修復が必要である。羽田の読解に従うと、次のようになる（［　］は欠けている文字の引用者による補いを示す）。

gord-rā ḥelm[-ō]mosāmeḥat khāhad būd
rowshan konam-īn dīde be dīdār-e to z[ū]d
ya‘nī ḥalīf kard del-e man kabūd
bedrūd-e man-ast tō ze man bedrūd[92]

英雄には温和さと寛大さとがあるだろう
そなたと早く相見ることで私はこの眼を輝かせよう
つまり友はわが心を青くしたのだ
（これが）私の惜別、そなたへの私からの惜別の言葉である

すべての句末が -ūd で韻を踏んでいるが、このままでは第一句(gord-rā) と第三句 (ya ʻnī, del-e man) はルバーイーの韻律に合わない。これに対し黒柳恒男は、第一・第三句に以下のような読解を提案した。

gar dar ajal-am mosāmeḥē khāhad būd
もしわが死（神）に寛大さがあるならば
ya ʻnī khalīq gardad dās-e kabūd
つまり、青い鎌（大空）は愛想がよくなる[93]

第一句は、実は羽田が一九一〇年の『史學研究會講演集』で最初に発表した読解そのものであるが[94]、これで韻律も整うので、おそらく正しい読みであろう。第三句は、原文をそのまま転写すると確かにこの通りになるのだが、問題はこれでもまだ韻律が合わない点である。岡田恵美子は、イランの文学者モジュタバー・ミーノヴィー Mojtabā Mīnovī（一九〇三―七七年）が示した修復案に基づき、第三・四句を次のように提案する（［　］内は岡田による補足）。

ya ʻnī [ke] khalīq gardad-īn charkh-e kabūd
bedrūd-e man-az-tō va to az man bedrūd[95]
つまり、この青い空は優しきものとなるだろう
私はそなたに別れを告げ、そなたは私に別れを告げる

第三句に "charkh"（空）を補うというミーノヴィーの案もまた、つとに羽田が――おそらくは東京外國語學校でヒンドゥスターニー語（ウルドゥー語）を担当していたバラカトゥッラー Moḥammad Barkatullāh（一八五九―一九二七年）の助言を得て――『史學研究會講演集』で示した読みと実質的に同一である。そして実際、この形であれば韻律・内容とも矛盾が生じない。勿論これは、ウマル・ハイヤームなど文学史上に残る詩人の作品の引用というよりは、泉州で慶政上人と出会った異国人自らが即興で詠んだルバーイーと見ることもできるので、そもそも原詩自体が韻律に合っていなかった可能性もあるだろう[96]。

なお、「南番文字」に言及した新村出の追悼文は、その後、前出の堀井梁歩の関心を引き、新村とのあいだで書簡や資料の往復が行なわれたことも付記しておこう[97]。

四　矢野峰人「RUBAIYAT の研究」

厨川白村との共編『十九世紀後半期英詩選』の刊行から三年半後の一九二五年十月、矢野峰人は雑誌『英語青年』誌上に「RUBAIYAT の研究」を発表し始める。フィッツジェラルド第五版の第1歌から第33歌までの詳細な訳注の形を取ったこの連載は、翌年五月まで十四回に亘ったが[98]、同年春に峰人が臺灣總督府よりイギリス留学を命ぜられたために[99]中断、しかし帰国後、その内容をほとんどそのまま、矢野禾積『Modern English Poetry（近

代英詩評釋）』（三省堂、一九三五年二月）に収録し、[100]同時に文語体の訳詩三十三首も、奥瑪開儼作／矢野禾積譯『四行詩集（るうばあいやあと）』（三省堂、一九三五年一月）として、百部限定の私家版の形で刊行している。[101]後年、日本を代表する『ルバイヤート』の蒐集家・翻訳家として知られることになる矢野の出発点に位置するのがこの連載なのである。[102]なお彼は、フィッツジェラルド訳初版および第四版に基づく訳注『Rubáiyát of Omar Khayyám（ルーバイヤアート）』（研究社小英文學叢書、一九二九年十月）も別途上梓している。

訳注の底本として第五版を選んだ理由を、矢野は連載第一回で以下のように述べる。

> 余が特にこゝに第四版（実際は第五版）を採つたのは、これが所謂 final version なるがゆゑに、譯者たる FitzGerald の遺志を尊重すると共に、rubai の數最も多き第二版に對しては既に竹友氏の邦譯を有するからである。然し、たとひ第四版を底本とはすると雖も、時に應じてはあらゆる editions の異同を考證するつもりであるから、結局一種の variorum Rubaiyat が出來るかも知れない。（四一頁）

実際、各歌の訳注では、本文の提示と文語訳に続き、版による異同と諸訳の紹介、語注などが記されてゆく。第一回で列挙され、第二回以下の訳注で引用されるさまざまな訳書や注釈書は三十点以上に上る。そのなかで、「Commentary, Textkritik 等も數ある中に、普通一般の讀者によつて（ママ）好個の指針となるものは、第二版を本文とせる Heron-Allen の註疏、第四版を Text とせる Mrs. Batson の詳解の類であらう」[103]と述べるように、本文の確定にはこれら二著を基本とし、さらに「Dole の variorum edition」[104]のような集注版をも参照しているようである。ただし、矢野の注解の本文も実際のフィッツジェラルド第五版と比べると異同が見られる。[105]

他方、参考とした訳書・注釈書類は訳者名・編者名のみで指示され、具体的な書誌情報を欠くため、同一訳者による複数の版がある場合には確定が必ずしも可能ではない。言語別では英語のほか、フランス語、ドイツ語、イタリア語、中国語に及び、翻訳形態もペルシア語原典からの直接訳に始まり、フィッツジェラルド訳の重訳、意訳（paraphrases）、パロディーに至るまできわめて多岐に亘っている。[106]日本語では片野文吉訳や荒木茂訳、[107]竹友藻風訳は勿論のこと、藻風編注の『Victorian Poets』も参照されている。また、

> 大正二年頃の事であるが、當時本邦に於ける英文學の最高權威であつた故某博士は、余等の爲に FitzGerald 譯の Omar's Rubaiyat を講ぜられた事があつた。昨年、本誌上にこの譯註を思ひ立つた時、極めて多くの有益なる暗示を受けたのは、其時の Text に細かく書き込んだ様々の memoranda, notes である。[108]

と自ら述べているように、かつて上田敏の文藝講座に参加したさいのノートが活用されていることも特筆すべきであろう。

第12歌は以下のように訳されている。

一瓢の飲一簞の
食（し）と一卷の詩書ありて
樹蔭にうたふ君居なば、
荒野もげにや樂土なれ。

「瓢（ひょう）」は酒を入れるひさご、「簞（たん）」は食物を入れるための円形の小型竹製容器、「食（し）」は「飯（めし）」。「一瓢の飲一簞の／食」は『論語』雍也第六にある「子曰わく、賢なるかな回や。一簞の食（し）、一瓢の飲、陋巷（ろうこう）に在り」[109]に典拠があり、粗末な食事、質素な生活に安住する譬えとして用いられる。原文の“A Jug of Wine”に「一瓢の飲」を、“a Loaf of Bread”に「一簞の食」を、そして“A Book of Verses”に「一卷の詩書」を巧みに対応させている。わざわざ故事成語の「一簞の食、一瓢の飲」の順番を逆転させたのは、英語原文に合わせたということもあるだろうが、それ以上に「七五／七五／七五／七五」に音数を揃える必要があったからだろう。この歌に限らず、矢野訳はほぼ全体が七五で統一されているのである。

この音数ないし詩型について矢野は、第二回に説明を付し、竹友藻風訳に対する土居光知の批評[110]を引きながら、『ルバイヤート』を「日本語に移す」には「五音と七音との混用體」が「至當のものと言ふべき」だが、

余は（中略）思ひ切つて全部を七五調に譯して見ようと思ふ。原詩の一行の全意が邦譯の一行にうまく盛り切れないといふ事は最初から分り切つた事實なるに、敢へてこれを試みんとするのは一般の朗誦に適する事を主眼としたからである。（中略）FitzGerald が Omar の原作に處した時の態度を假に學び、時には思ひ切つた省略も換語も試み、足らざるをば註によつて補ひたいと思ふ。

（六九頁）

と述べている。この第12歌の場合は、原文の“Beside me”に対応する言葉は省かざるをえなかったものの、ほぼ過不足なく原意を写し取っているように思われる。

【註】においては、語注は「**were**: would be. **enow**: enough」のみで、あとはフィッツジェラルド訳各版の異同、対応するマッカーシー訳とシュラブソール訳の紹介、「若しOmarをHedonistと呼ぶ事が正しいならばこの一篇こそ正しく彼のHedonismの“condensed expression”である」[111]というヘロン＝アレンの評価の引用を行ない、ブラッドレーKatherine Harris Bradley（一八四六―一九一四年）とクーパーEdith Emma Cooper（一八六二―一九一三年）の二人の叔母・姪の閨秀詩人がフィールドMichael Fieldの筆名で発表した詩集 *Underneath the Bough: A Book of Verses* (London and New York: G. Bell and Sons, 1893) の標題も、この歌から取られたことに触れている。

もう一編、第8歌も見ておこう。

西京と東都を問はず
苦酒芳醇のけぢめなく
いのちの酒は垂れやまず
いのちの木の葉散りやまず

第一・三・四句の句末が韻を踏んでいるほか、音数の点では、全編のなかでも珍しく第一句のみ「五七」だが、それ以外は「七五」に統一されている。七と五の限られた音数では、原語の“Naishápúr or Babylon”といった長い固有名詞をそのまま反映させることが難しいため、「西京と東都」に置き換えているのはやむを得ない措置であろう。同様の例は「ジャムシード」「カイコバード」などの人名や「パフラヴィー」といった言語名についてもあてはまる。[112] 固有名詞が捨象された結果、これらの文語訳ではイランという地域や時代の枠を外れ、より一般的な叡智の詩として読みうる可能性が高まったとも言えるかもしれない。

第8歌の【註】では、版による異同を示したのち、バットソンや荒木茂の訳によって対応するペルシア語原詩を紹介し、「バルフ」「バグダード」が「バビロン」「ニーシャープール」に変化している点を指摘した上で、“Balkh,”“Nishápúr”に語注を付す。最後は、「此一篇は evanescence of human life を歌つたものである」という、ヘロン＝アレンの評語[113]で締め括っている。

矢野峰人の注釈を全体として見ると、例えば英語学習者を対象とした小川忠藏の訳注と比べ、文法的な説明よりは内容の解釈に重点が置かれ、本文校訂、ペルシア語原詩との比較、諸訳の紹介、固有名詞や術語の注解などに幅広く目配りがなされている点に特徴がある。文語訳は、わずかな語数のなかに原詩の心を反映するために工夫が凝らされ、古語[114]も活用されて簡潔だが格調が高い作品に仕上がっている。戦後にペルシア語原詩からの直接訳を公刊した小川亮作（一九一〇―五一年）が述べたように、これは「詩としてすぐれてはいるが、七五調の短い行では原文の意味を全部傳え得ない憾みがある」[115]のも事実だが、元来が注釈と一体のものとして詠まれたという事情も考慮する必要はあろう。このあと、戦後にかけて彼は七五調のみには拘泥しない新たな文語訳を世に問うことになる。

五　『ルバイヤート』への言及

大正から昭和にかけては、一般の人々が『ルバイヤート』を原文で読んでそれに親しみ、引用する機会が増えてゆく時期でもあった。そうした事例をいくつか紹介しておきたい。

（1）　高田半峰の講演

政治家として活動する一方、東京専門學校（のち早稲田大學）で長く教鞭を執り、のちには學長・總長も務めた高田早苗（号は半峰。一八六〇―一九三八年）[116]は、一九一四年四月から十一月まで欧米の諸大学を視察、帰国後の十二月、歸一教會例會で行

なった講演「歐米漫遊中の宗教雜觀」[17]のなかで欧米各国のキリスト教信仰の実態について印象を報告すると同時に、「此の（宇宙の）後に神が若しあるならば、それが人の如きものであるといふ考は起りませぬ」「自分にはゴッドは必ずしもさういふ人格を有つた者とは考へられない」（二四九頁）と違和感を表明する。そして、帰国の途に就いた太平洋の船上で生じた疑問――「此森羅萬象は如何にして出來、如何なるものであるか。吾人人間は何處から來て何處へ行くのであるか。それを哲學者は確かと教へて呉れない。其問題に就ては解答を得ることが出來ない。それならば什うして此の問題は解いたら宣からうか」（二五一頁）――に言及する。半峰によれば、この疑問に一つの解答を与えてくれたのが、同船のアメリカ人軍医に教えられた『ルバイヤート』であった。

亞米利加人には能く讀まれて居るさうで、餘程米國で流行るらしい、面白い本だといふので借りて讀んで見ました。（中略）丁度私が問はんと欲する――困つて居るやうな事柄に就て歌つて居ります。

Myself when young did eagerly frequent
Doctor and Saint, and heard great arguments
About it and about, but ever more
Came out by the same door wherein I went.

即ち私が若い時分に屢〻學者や聖人の門を叩いて大議論を聞いた。それやこれやの問題に就て大議論を聞いた。併し何時も始め這入つた時と同じ門から出ざるを得ざるを哀しむといふ様な意味であつて、いくら聖人や學者の說をたゝいても何の得る所がないといふ意味であります。實は古今同一轍であつて、私は此の詩人に同感を表せざるを得ませぬ。

（二五二頁）

ここで引用されているのは、フィッツジェラルドの第三版または第四・五版の第27歌[18]である。宇宙の秘密を解くのに科学や哲学は役立たないという主張に半峰は共感を表明する。その上で、「人間の前後が分らなければ今日主義になるより外に仕方がない」が、そのさいに取るべき二つの道のうちの一つが「享樂的生涯を送つて自ら慰める」「オマアカイヤム」の主義であるとして、第三―五版の第74歌[19]を引用する。

Yesterday This day's madness did prepare
Tomorrow's Silence, Triumph or Despair?
Drink! for you know not whence you came nor why;
Drink! for you know not why you go, nor where.

即ち今日の狂は昨日が準備したるなり、明日の沈默勝利絶望何に因つて然るを知らず、汝は何處より來り何が故に來れるを知らず、故に飲め、汝は何處に去るかを知らず、故に飲め、と要するに飲め〳〵何でも飲むが宜しいといふ一種の教へであります。[20]

（二五五頁）

詩の二行目の末尾に本来のコロンの代わりに疑問符が置かれたため、[121]半峰は「何に因つて然るを知らず」と意訳しているが、コロンであれば、二行目は動詞“prepare”の目的語と取って、「昨日は今日の狂気と明日の沈黙、勝利、絶望とを準備した」と読むべきところであろう。ともあれ半峰はこの句に、不可知論と享楽主義の結合を見る。これに対し、第二の道は「不可思議のことはイツソ此の儘にして置いて宜くはないか、其の内に何となく自ら履むべき道が分つて居るやうに思はれる。其の道を辿つて行かう。知るを知るとし、知らざるを知らずとせよ」という態度で、「前者は竹林の七賢的で老荘に近く、後者には儒教が一番近い」。「私は今の所この（儒教の）見地に立つより外に仕方がない」（二五六頁）というのが半峰の結論である。

宗教人を多く含む聴衆を前にしての講演であるにも拘わらず、半峰は自らの不信仰を表明し、『ルバイヤート』の不可知論や享楽主義に対しては、「之れを知るを之れを知ると為し、知らざるを知らずと為す。是れ知る也」という『論語』「為政第二」[122]の教えを以てよしとする。これは教育者としての中庸を得た穏当な態度であろう。

（2）宮澤賢治と保阪嘉内

一方、宮澤賢治（一八九六―一九三三年）が盛岡高等農林學校在学中に仲間と創刊した謄写版印刷の同人誌『アザリア』にも、『ルバイヤート』の影響が見られることが知られている。その第四號（一九一七年十二月十六日発行）に同人の保阪嘉内（一八九六―一九三七年）が寄稿した小説「打てば響く」[123]である。賢治と嘉内はとくに法華経を通じて「内密な友情」[124]で結びついていたとされ、この小説も二人の友愛の表現という側面があったようである。そのなかに『ルバイヤート』からの二首が英語のまま引用された箇所がある。

まず筆者は、「吾々が絶対と云ふもの。（中略）こゝにほんとう（ママ）に限りなき、きわまり（ママ）無き空と土とを思ふ。この空と土とに居ますまことのひとがある」と述べて、法華経という「絶対」真理と、「まことのひと」すなわち釈尊とに言及したのち、人間をその「でっかーい眼で、――心で見てゐたら吹き出さずにや居られないだらう」が、それでも「こゝにまことの願あり」として、第一の歌を引用する。

“And that inverted Bowl we call the sky,
whereunder crawling coop’t we live and die,
Life（ママ） not thy hands to It for help, for it
Rolls impotently on as Thou or I”（from Omar Khayyam）
（我々が空と呼ぶあのさかさまの盃／その下に閉じ込められた我々は、這い回りつつ生き、そして死ぬ／その空に両手を伸ばして助けを求める勿れ、なぜならそれは／そなたや私と同様、無力なまま回転するだけだから）

書き写すさいの誤記はあるものの、これはフィッツジェラルド訳初版の第52歌[125]である。そして「法守る神も鑑給へ　か弱なる

身に起したる願ひのまこと」と続ける。「か弱なる」人間のさまの描写としてこの歌を引用したのち、無力ではあっても「願ひ」――「絶対」的存在である法華経による自己や他者の救済という理想であろうか――の実現を企図する。そのためには力を貸し与える「恋人」すなわち友人の存在が必要となり、「恋人」への呼びかけがなされる。

> "Ah, Love ! could thou and I with fate conspire
> To grasp this sorry scheme of Things entire,
> Would not we shatter it to bits — and then
> Re-mould it nearer to the Heart's Desire !"
> (おお恋人よ、そなたと私が運命と共謀して／物事全体のこの悲しい仕組みを把握できるなら／我々はそれを粉々に破壊し――それから／それをもっと心の望みに叶うよう作り変えるのではないか)

こちらは同じ初版の第73歌の引用[126]である。菅原千恵子（一九四九年生）の言葉を借りれば、「あなたと私がこうして出会い、心を一つにしておなじ理想に燃えること、これも運命とするならば、ぜひその運命を味方にして、困難ではあっても、二人が理想とする世界に造り直したい」[127]という気持ちを嘉内はこの歌に託す。そして「あゝ恋人よ、より来よ、われとよき歌をうたお（ママ）うではないか」という呼びかけを以てこの一編を締め括っている。嘉内は原文の "Love" を男性の友人と解釈することで、この歌を自らの状況に引きつける形に読み替えているのであろう。「われとよき歌をうた」おうという一節は、同じ『ルバイヤート』の初版第11歌（第二版以降では第12歌）の「そなたが荒野のなか、私の傍らで歌うなら」and Thou / Beside me singing in the Wilderness という一節をさえ想起させる。そして、賢治の方もまた『ルバイヤート』を意識していたらしい。例えば、彼が生前に編集を終えていながら刊行されなかった『春と修羅　第二集』の「氷質の冗談」にある「青くかゞやく天の椀[128]」や、同じく未刊行の『春と修羅　第三集』の「〔うすく濁った浅葱の水が〕」を改稿した「雲」に出る「青じろい天椀[129]」といった表現は、先に引用された第52歌の "that inverted Bowl" に由来するのではないかという金子民雄（一九三六年生）の指摘[130]もある。

賢治や嘉内がフィッツジェラルド訳にどのような形で触れたのかは明らかではないが、イギリスの詩人・文学者パルグレイヴ Francis Turner Palgrave（一八二四―九七年）が編纂した著名な名詩選『ゴールデン・トレジャリー』*The Golden Treasury*（全四巻、一八六一―九一年）の第四巻のうち、「補遺詩偏」Additional Poems が加わった一九〇七年以降の版[131]には、フィッツジェラルド訳初版全七十五歌が収められているので、こうした詞華集が媒介となった可能性もあるかもしれない。

（3）　徳冨蘆花『日本から日本へ』

最後に、徳冨蘆花（本名は健次郎。一八六八―一九二七年）の旅行記『日本から日本へ』にも触れておきたい。これは一九一九

年から翌年にかけて、妻の愛子（一八七四―一九四七年）とともに行なった世界一周旅行の記録である。エルサレムへ向かう途中で立ち寄ったエジプトでの見聞を記した「カイロ日記」の章で蘆花は、しばしば自分たちを襲う過去の憂愁について、

私は妻に曰ふ。人は、過去の重荷に苦しむ。はなれやうとしても、離れぬ。わるくすると、過去に責め殺される。唯一つ、過去から追(のが)るる道がある。それは、氣をかへて、現在を樂しむのだ。[132]

と述べ、アラブ世界に身を置いていたための連想であろうか、「Arabian Night(sic)にある船乗りSindbadの話の中に出て來る〝老人〟」、すなわち第五航海における「海の老人」the Old Man of the Sea / Shaykh al-Baḥr の話を引き合いに出す。シンドバードは、背中に取り憑いて苦しめるこの老人に酒を飲ませて酔わせ、ようやくのことでその手足を振りほどいて打ち殺す。「つまり、老人‥‥過去‥‥は、もがいても、あがいても、はなれぬ。ふりはなすには、唯一つ、現在に躍るのだ」。[133]

而して、私は、Fitzgerald(sic)の英譯になる波斯の詩人Omar Khayyamの絶句一首を誦して、妻に聞かせた。

“Ah my beloved ! Fillthecup(sic)
That clears of past regrets and future fears !
Tomorrow ? — Why, tomorrow I may be myself
With the yesterday’s ten thousand years !”

私共は、過去を感謝し、未來を祝するから、必しもこれに共鳴はせぬ。然し、現在のCupに歡喜を滿たすに、何の無理があらう？[134]

連想はアラブからペルシアへと拡がり、『ルバイヤート』の一首が引用される。これは、初版の第20歌、第二版以降では第21歌に対応するが、記憶によったためか、原文とはかなり異なっている。仮に初版の本文を挙げると、以下のごとくである。

Ah, my Belovéd, fill the Cup that clears
To-day of past Regrets and future Fears —
To-morrow ? — Why, To-morrow I may be
Myself with Yesterday’s Sev’n Thousand Years.[135]

とくに「今日」To-dayが脱落し、「七千年」が「一万年」に変わっている点が目につく。しかし、当時の知識人のつねとして、有名な英詩をすぐさま暗誦できるほどに読み込んでいたことには逆に驚かされざるをえない。ここでもまた、半峰や賢治・嘉内の場合と同様、原詩を現在の自分の境遇に合わせて解釈し、導きの指標とする傾向を見て取ることができる。この時期には、中学校の英語教科書にもウマル・ハイヤームの作品とされる詩[136]が掲載されていたことを付記しておこう。

六　映像と絵画

（1）映画の輸入

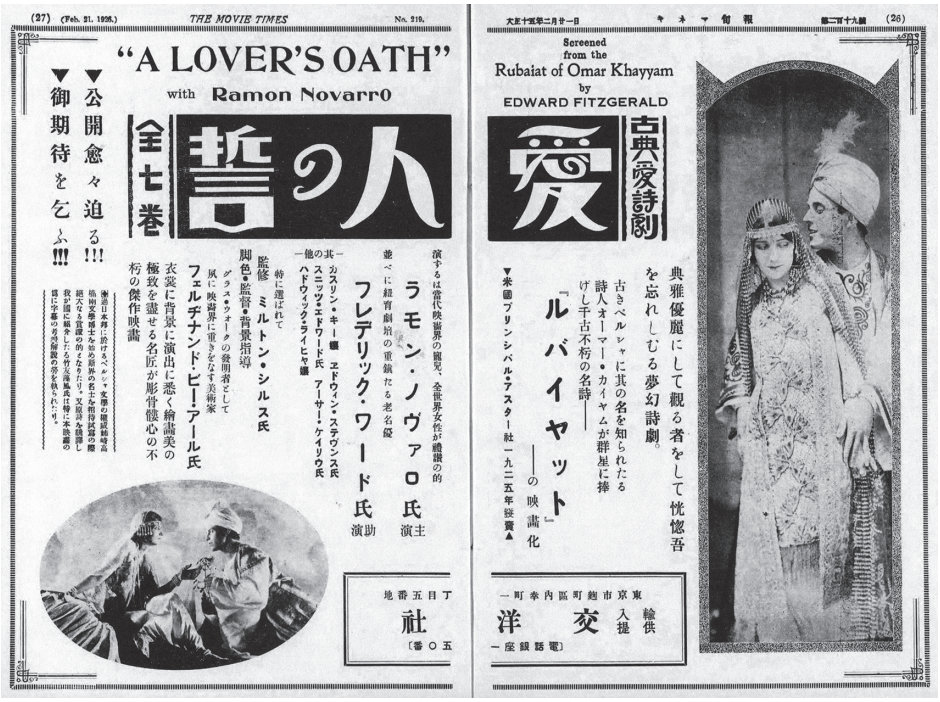
大正時代にはウマル・ハイヤームを主題としたアメリカの無声映画が二編、相次いで公開された。その一つ、ジェイムズ・ヤング James Young（一八七二―一九四八年）監督の『ペルシャの暴君』*Omar the Tentmaker*（一九二二年十二月）は、一九二四年五月三十日に東京館・牛込館で封切られている。[137] 原題の "the Tent-maker" とは「ハイヤーム」Khayyām の原義「天幕作り」の英訳。劇作家のタリー Richard Walton Tully（一八七七年頃―一九四五年）が一九一四年にブロードウエイで上演した喜劇を自ら脚色し、舞台と同じく俳優ポスト Guy Bates Post（一八七五―一九六八年）を主人公のウマル役に起用している。

その筋立てによると、師のイマーム（導師 imam）の下でウマル Omar とニザーム Nizam, それにハサン Hassan の三名は生涯の親交を誓い合う。ウマルは過激な著述のため社会の追放者となり、師の娘シーリーン Shireen と密かに結婚するが、シャーが彼女の美しさを伝え聞いて拉致し、獄中で子供を産ませる。その子である小シーリーン Little Shireen は助けられてウマルの許に届けられる。十七年後、ニザームが大臣となると、総督に任命されたハサンはキリスト教徒の十字軍兵士を助けた罪でウマルに死刑を宣告する。だが彼はニザームのお蔭で救われ、シーリーンと再会、小シーリーンが自分の娘であることを知って、彼女とキリスト教徒との結婚を許す。

おそらくニザームはセルジューク朝の著名な政治家ニザーム・アル＝ムルク Niẓām al-Mulk（一〇一八―九二年）、ハサンはイスマーイール派の分派であるニザール派の創始者で、アラムート要塞に拠っていわゆる暗殺教団を組織し、セルジューク朝と対立したハサン・サッバーフ Ḥasan Ṣabbāḥ（一一二四年歿）の人物像をもとに造形されているのだろう。ニーシャープールで学友であったウマルと彼ら二人とが、将来出世したら協力し合うことを誓ったという逸話は、フィッツジェラルド自身がその『ルバイヤート』訳の序文で紹介して広く知られるようになったが、[138] 三人の年齢の違いから歴史的には根拠がないとされる。[139] 妻シーリーンやその娘などは、舞台と映画のための創作であり、イスラムではムスリム女性はムスリム男性との結婚しか許されないので、小シーリーンがキリスト教徒の恋人と結ばれる結末も、現実にはありえない設定である。当時の宣伝文句には、

> 映畫を通じて美を味（ママ）はんとするものは來れ。映畫によつて愛を讃美せんとするものも來れ［。］人間性に潜む誠も、愛も、憎しみも、さては悲しみも、喜びも、皆盛りて此の一篇にあり［。］一千年の昔ペルシャに住める偉大なる詩人オーマーの一生は今日に至りて尚吾人が生活に交渉を持つ。[140]

とあって、一般向けの娯楽映画が企図されていたことが判る。だが、ウマル・ハイヤームの生涯を知ろうとするもう少し真面目な観客にとっては、いささか物足りない内容だったようだ。



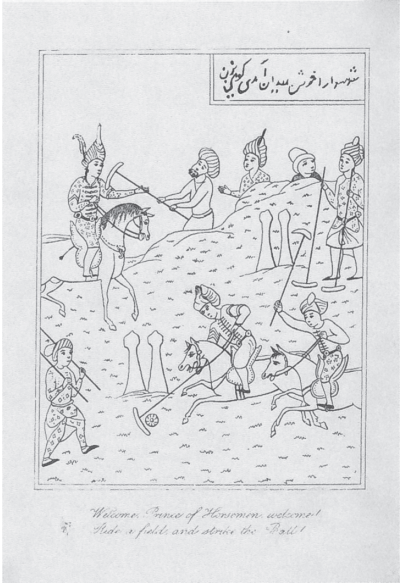
図版２　「愛人の誓」広告（『キネマ旬報』第 219 號，1926 年 2 月 21 日，26–27 頁）

批評家の飯島正（一九〇二—九六年）は、この作品を観終わったあとに残るのが「ポスト氏の大芝居」だけで、「ペルシャは依然として、我々の頭よりは遠い遠いある所」にしか存在せず、ポストの演技も「ペルシャの詩人にして天文學者、科學者オオマア・カイヤムといふ氣はしないで、何だかふやけたロメオのやうな味がする」[141]と辛口の評価を残している。

詩人の堀口大學（一八九二—一九八一年）は大正末に刊行した詩集『砂の枕』のなかに「カイヤムよ」を収め、「カイヤムよ　私はお前を思ふ／酒と薔薇（しようび）の詩人よ／私もお前のやうに／酒を愛し薔薇（しようび）を愛し／少女（をとめ）を愛するのだが／さうして私も詩（うた）を作るのだが／フィッツ・ヂエラアルはまだ生れない」[142]と歌って自らの才能の乏しさを嘆いてみせた。「少女（をとめ）を愛する」ウマル・ハイヤーム像は、フィッツジェラルド訳からは必ずしも構成できないので、この作品も映画の影響を受けている可能性がある。

もう一編の映画は、それから二年後の一九二六年三月十九日に葵館・神田日活館・大久保キネマで封切られたアール Ferdinand P. Earle（一八七八—一九五一年）監督のアメリカ映画『愛人の誓』*A Lover's Oath*（一九二五年九月）である。[143] 当時の日本での広告（**図版２**）に、

典雅優麗にして觀る者をして恍惚吾を忘れしむる夢幻詩劇。／古きペルシャに其の名を知られたる詩人オーマー・カイヤムが群星に捧げし千古不朽の名詩——『ルバイヤット』——の映畫化[144]



図版４　フィッツジェラルド訳『サラーマーンとアブサール』口絵（1856 年）

図版３　『地上巡禮』第壹卷第貳號表紙（1914 年 10 月）

とあるように、フィッツジェラルド訳の『ルバイヤート』を随所に字幕で織り込みながら、ノバッロ Ramon Novarro（一八九九―一九六八年）演ずるウマルの甥ベン・アリー Ben Ali と、キー Kathleen Key（一九〇三―五四年）演ずるシーリーン Sherin との恋物語を「夢幻詩劇」に仕立てている。木村千疋男の言葉を借りると、この作品の魅力は「カイヤムの星を謳ひ月を崇（ママ）む風の古詩の一節すら」もっぱら「眼」に働きかける点、「背景の繪畫美が齎らす快よい視感覺」[145]にあるという。右の広告には「原詩を飜譯し我が國に紹介したる竹友藻風氏は特に本映畫の爲に字幕の考證解説の勞を執られたり」[146]という言葉も添えられており、藻風もこの映画は『ルバイヤート』を一般大衆に周知させるよい機会だと考えたに違いない。

（2）雑誌『地上巡禮』表紙

最後に、やはり視覚藝術の面でフィッツジェラルド訳が及ぼした影響について触れておこう。北原白秋（本名は隆吉。一八八五―一九四二年）が自ら主宰する巡禮詩社の機関誌として刊行した『地上巡禮』（一九一四年九月―一九一五年三月、全六冊）は、その創刊號から第壹卷第四號まで、表紙の装飾に毎号同一のペルシアの細密画を用いていた（**図版３**）。これは元来、フィッツジェラルドがペルシアの神秘主義詩人ジャーミー ʻAbd al-Raḥmān Jāmī（一四一四―九二年）の哲学的寓意詩『サラーマーンとアブサール』*Salāmān va Abṣāl* の翻訳を匿名の私家版として一八五六

年に刊行したさい、その口絵に使用した図像（**図版4**）であった。[147] 描かれているのは、ペルシア語で「チョウガーン・バーズィー」chowgān-bāzī と呼ばれる馬上球技（ポロ）の場面である。ジャーミーの作品中にこの球技が登場するので、[148] その説明ともなるようこの絵が選ばれたのであろう。

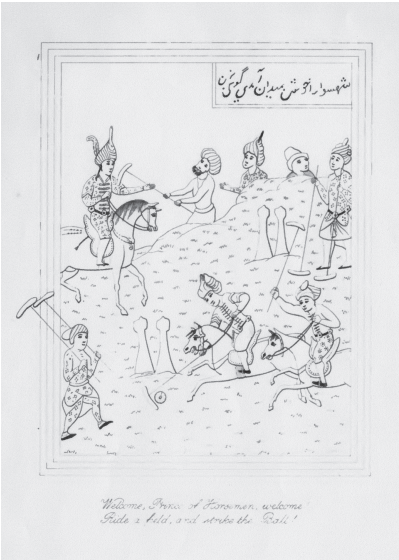
フィッツジェラルド自身の解説[149]によると、この図案は元来はイギリスの旅行家・東洋学者のウーズレー William Ouseley（一七六七―一八四二年）の『ペルシア旅行記』第一巻の「補遺」[150]に掲載された、ウーズレー蒐集の一五四九年のペルシア語写本からの描き起こしであるという。右上のカルトゥーシュ（箱型の枠内）に記されているのは、ペルシア詩人ハーフィズ Ḥāfiẓ Shīrāzī（一三二六―九〇年頃）の抒情詩の一節である。

shahsavārā khosh be meydān āmadī gūyī be-zan
名騎手よ、ようこそ競技場へやってきた、球を打て[151]

フィッツジェラルドはこの図版の欄外に、自らの英訳を筆記体で書き入れた。

Welcome, Prince of Horsemen, welcome!
Ride a field, and strike the Ball!
（ようこそ、騎手たちの王子よ、ようこそ
競技場へ乗り込んで球を打て）

この図像は、フィッツジェラルド訳『ルバイヤート』の第四版[152]が刊行されたさいにも口絵に利用された。第四版は『サラーマーンとアブサール』をも収録しているからである。もっとも、『ルバイヤート』第70歌（初版第50歌、第二版第75歌）でも同じ球技への言及がなされるので、読者はそちらと関連させて読むこともできるであろう。第五版（一八八九年の三巻本著作集第三巻や、一九〇三年の七巻本著作集第七巻）[153]でもこの口絵は踏襲されているのみならず、画面左下の人物が持つ打球槌（chowgān）の先が画面の枠をはみ出して消えていた部分も復元されている（**図版5**）。実はウーズレーの原画では打球槌の先まで叮嚀に描かれていたのだが、フィッツジェラルドは自らの口絵に転用するさいにそこを削除してしまったので、彼の歿後、第五版を編集したライトがウーズレーの本来の原画と差し替えたのであろう。



図版5　『フィッツジェラルド著作集』第7巻口絵（1903年）

白秋がどのような経路でこの口絵を入手したのかは不明だが、『地上巡禮』表紙の図案では打球槌の先が描かれ、三重の外枠が復元されているところから、第五版（またはそれを複写した二次的文献）が利用されたと判断できる。忠実に復刻された欄外の英訳に見える「競技場へ乗り込んで球を打て」という呼びかけは、「深く藝術の精髄を究め、常に權威ある詩壇の新聲たらん」[54]として門人たちを集めたこの雑誌の意気込みを反映するかのようである。これもまた広い意味で『ルバイヤート』が大正日本に及ぼした波動の一つと言えるであろう。

［注］

＊ 引用文中の引用者によるルビには丸括弧を付して原ルビと区別した。

＊ 本文における引用文中の小字による丸括弧内、およびブラケットを付した句点［。］は引用者による補足である。

＊ 注において筆者の旧稿「明治日本の『ルバイヤート』」（『Odysseus』第二十号、二〇一六年三月、一―三七頁）および「大正日本の『ルバイヤート』」（『Odysseus』第二十一号、二〇一七年三月、一―三七頁）に言及する場合は、それぞれ「明治日本」「大正日本」と略記する。

（1） 竹友藻風の事績については、矢本貞幹「竹友藻風傳」（『英語青年』第百一巻二号、竹友藻風追悼号、一九五五年二月一日、五三頁）、「竹友藻風著作目録」（『竹友藻風選集』全二巻、藤井治彦編集、南雲堂、一九八二年十月、第一巻、四九一―九六頁）、藤井治彦「竹友藻風小伝」（『竹友藻風選集』第二巻、五五七―七三頁）などを参考にした。

（2） 福原麟太郎「折り折りの人〈7〉竹友藻風――上田敏門下の俊才」『朝日新聞』一九六七年一月二十三日、夕刊第七面。のち『折り折りの人』Ⅲ、朝日新聞社、一九六七年八月、三六―三八頁。『福原麟太郎著作集』5（随筆Ⅰ　旅・人）、研究社出版、一九六八年十月、五四一―四二頁。引用は単行本による。初出は「薫陶（くんとう）」「衣鉢（いはつ）」とする。

（3） 「明治日本」九頁。

（4） 矢野峰人「竹友藻風氏を想う」『英語青年』第百一巻二号、五五頁。

（5） 『ルバイヤット』一一七頁「上田敏先生の言はれたやうに、「これは矛盾を矛盾とし、懐疑を懐疑とし、心の誠を失ふまいとする抒情の聲であつて、第一に反抗の叫（ライトモチフ）、第二に享樂の敎、第三に絶念の悟、この三者が全曲の伴隨樂音（むね）になつてゐる」。「末の行は上田先生の言葉を以て言へば「心に釘うつ如く」一首の結語となつてゐる」。これは、片野文吉譯『ルバイヤット』（開文館、一九一四年三月）に寄せた「序」の一節。「明治日本」七頁に引用。敏の原文と藻風の引用とでは細部に異同がある。

なお、敏との関係については、竹友藻風「［旧師を語る］上田敏先生」（『文藝春秋』第十一巻五號、一九三三年五月、八〇―八五頁。のち「上田敏先生」として、同『冬扇帖』文体社、一九三四年三月、一一〇―一九頁。『竹友藻風選集』第二巻、四二七―三三頁）に回想がある。

（6） *The Second Edition of Edward FitzGerald's Rubá'iyyát of 'Umar Khayyám*, Edited, with an Introduction and Notes, by Edward Heron-Allen, London: Duckworth and Co., 1908. 以下、Heron-Allen 1908と略記。

なお、藻風旧蔵書は大阪大学総合図書館に「竹友文庫」として収められているが、本書もそのなかに含まれている。以下、藻風の項では、同文庫収蔵書はその旨付記することにする。同文庫については、玉井暲「「竹友文庫」と「藤井文庫」」（『大阪大

学図書館報』第三十五巻四号、二〇〇二年三月、一―四頁）に紹介がある。

（7）*The Rubáiyát of Omar Khayyám*, Translated by Edward FitzGerald, with Twelve Photogravures after Drawings by Gilbert James, London: George Routledge and Sons, Limited / New York: E. P. Dutton & Co., 1904. 竹友文庫には欠。本書はフィッツジェラルド訳初版本文とジェイムズの十二葉の挿絵を収めており、そのうちの八葉がアルス版に使用されている。ただし、アルス版自体には、引用した挿絵の画家名や出典が示されているわけではない。両者の対応関係は以下の通り（「＝」の手前がアルス版挿絵の対面頁の歌番号。「＝」の直後はラウトレッジ版の挿絵の対面頁の頁番号と歌番号を示す）。

第1歌＝Frontispiece（第75歌）、第5歌＝p. 20（第5歌）、第12歌＝p. 32（第11歌）、第15歌＝p. 36（第13歌）、第25歌＝p. 48（第19歌）、第36歌＝p. 76（第33歌）、第38歌＝p. 78（第34歌）、第46歌＝p. 106（第48歌）。

フィッツジェラルド訳第二版と初版とでは、もともと対応する歌番号がずれているが、前者の第1歌と後者の第75歌、前者の第36歌と後者の第33歌の対応以外は、すべて同一の挿絵が同一の歌に付されている。アルス版の第36歌は、初版では対応する歌が存在しないため、第二版第37歌に対応する初版第33歌の挿絵を使用したのであろう。

同じ画家の挿絵十四点を収めたいくつかの刊本、例えば以下のスミザーズ版やグロセット版には、アルス版の第38歌に付された挿絵が含まれていないため、アルス版の底本ではありえない。

・*Fourteen Drawings Illustrating Edward FitzGerald's Translation of the Rubaiyat of Omar Khayyam* by Gilbert James, London: Leonard Smithers and Co, 1898.

・*Rubáiyát of Omar Khayyám*, Rendered into English Verse by Edward FitzGerald, Fourth Edition, with Notes, Together with a Tribute in Quatrains by Andrew Lang, and a Brief Biography of Both Poet and Translator, with Illustrations by Gilbert James, New York: Alex Grosset and Company, 1899.

画家ギルバート・ジェイムズについては生歿年を含めた生涯が長らく不明であったが、最近のフォレスト Bob Forrest の研究によってようやく細部にまで光が当てられるようになった。

http://www.bobforrestweb.co.uk/The_Rubaiyat/N_and_Q/Gilbert_James/Gilbert_James.htm

http://www.bobforrestweb.co.uk/The_Rubaiyat/N_and_Q/Gilbert_James/Addendum/Addendum.htm

（8）*Rubáiyát of Omar Khayyám*, Translated by Edward FitzGerald, Edited, with Introduction & Notes, by Reynold Alleyne Nicholson, London: Adam and Charles Black, 1909. 竹友文庫蔵。本文はフィッツジェラルド訳初版を使用。ギルバート・ジェイムズのカラー挿絵十六葉を挿入。これらの挿絵は、前注で挙げたラウトレッジ版所収の同じ画家によるモノクロ・グラビア版とは内容がすべて異なっている。

（9）*The Ruba'iyat of Omar Khayyam*, Translated by Edward FitzGerald, with a Commentary by H. M. Batson, and a Biographical Introduction by E. D. Ross, London: Methuen and Co., 1900. フィッツジェラルド訳第五版の本文に基づく注釈。アルス版一三五頁に「バットスン夫人の解説に依ると」として本書の説の紹介があるが、これはヘロン＝アレンの注釈にも引用されているため、その時点で訳者が本書を直接参照したとは断言できず、竹友文庫にも含まれていない。

なお「第五版」とは、フィッツジェラルドの歿後、その遺稿を託されたトリニティー・カレッジの副学長ライト William Aldis Wright（一八三一―一九一四年）が、第四版にフィッツジェラルド自身の書き入れた二か所（第43・49歌）を含む合計二十箇所

ほどの修正を加えた本文を指し、最初は三巻本著作集の第三巻に収録される形で一八八九年にマクミラン書店から刊行された。その後、一八九九年に同書店から出された〈ゴールデン・トレジャリー・シリーズ〉や、一九〇三年の七巻本著作集第七巻とのあいだには多少の異同が見られる。以後、「第四版」と銘打った書籍でも、実際にはこの「第五版」の修正が反映されている場合が少なくない。バットソン注釈版本文はほぼ〈ゴールデン・トレジャリー〉版に依拠しているようである。第四版・第五版の異同は末尾の「附表」にまとめた。以下、本稿では両者の区別が必要ないし可能な場合には「第五版」の呼称を使用する。

・*Letters and Literary Remains of Edward FitzGerald*, Edited by William Aldis Wright, 3 vols., Vol. 3, London and New York: Macmillan and Co., 1889.

・*Rubáiyát of Omar Khayyám, The Astronomer-Poet of Persia*, Rendered into English Verse, London: Macmillan and Co., Limited / New York: The Macmillan Company, 1899.

・*Letters & Literary Remains of Edward FitzGerald*, 7 vols., Vol. 7, London: Macmillan and Co., Limited / New York: The Macmillan Company, 1903.

(10) *The Quatrains of Omar Khayyám*, the Persian Text with an English Verse Translation, by E. H. Whinfield, London: Trübner & Co., 1883. アルス版一三一頁に「Whinfield の「オオマア・カイアム四行詩」(Quatrain 108)」への言及があるが、これもヘロン＝アレンの注釈からの孫引きの可能性があり、この時点で現物を参照したかどうかは不明。竹友文庫にも欠。同文庫に含まれる一九二〇年の刊本（後注73参照）は、一八八三年版とは歌番号が異なる。

(11) *Les Quatrains de Kheyam*, traduits du Persan par J. B. Nicolas, Paris: L'Imprimerie Impériale, 1867. 以下、本稿では Nicolas と略記する。竹友文庫には欠。

(12) *Les Quatrains d'Omar Khayyám*, traduits du persan sur le manuscript de la Bodleian Library d'Oxford, introduction et notes de Charles Grolleau, Paris: les Editions G. Crès et cie, 1922. 竹友文庫蔵。

(13) 句読点やルビ、送り仮名、漢字と仮名の区別、記号（括弧やダッシュ）類、片仮名の固有名詞・術語などの表記上の異同を別とすると、訳詩自体にわずかでも改訂がなされているのは全百十歌中、次の十八歌にすぎない。第2・6・15・18・36・47・50・60・81・83・84・86・97・100・106・108・109・110歌。

(14) 三頁の目次の末尾に「口畫　ギルバアト・ジェイムズ筆『ルバイヤット』第四十章」とある。これは前注（8）のニコルソン注釈版一〇五頁の対面頁に挟まれた、初版第36歌（第二版では第40歌に対応）への挿絵である。

(15) Edward FitzGerald, *Rubáiyát of Omar Khayyám: A Critical Edition*, Edited by Christopher Decker, Charlottesville and London: University Press of Virginia, 1997, p. 38. 本書は以下 Decker と略記。

(16) Decker, p. 38.

(17) 土居光知「竹友氏の譯詩ルバイヤットを讀みて」『英語青年』第四十五卷五號、一九二一年六月一日、一四八頁。

(18) 「明治日本」九―一〇頁。

(19) 外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎仝撰『新體詩抄』（初編、丸屋善七、一八八二年七月）の「凡例」にも「此書ニ載スル所モ亦七五ナリ」とある。

(20) 森亮「日本におけるルバイヤット」『英語青年』第百十九巻十一号、一九七四年二月一日、六七七頁。のち、オーマー・カイヤム／森亮訳『ルバイヤット』クラテール叢書3、国書刊行会、一九八六年十二月、一五九頁。ただし、同書「解説」一四六頁では、「竹友藻風の英訳第二版からの文語全訳（中略）よりも蒲原有明の第四版からの六篇の部分訳の方がずっと面白く訳せていた」とも記している。

(21) 原詩の二重引用符が訳詩に反映されていない場合も見られる。

第20歌四行目「クウ、クウ、クウと啼きぬ、そはまたクウ、クウ、クウと。」の原詩は“And “Coo, coo, coo,” she cried; and “Coo, coo, coo.””であり、第27歌四行目「痴れものよ、報酬はあらず、そこここに。」の原詩は““Fools! your Reward is neither Here nor There!””となっている。

(22) 「悔」の歴史的仮名遣いは「くい」である。西村書店版では訂正されている。

(23) 鍵括弧の使用法は必ずしも厳密ではない。そもそも冒頭が大文字表記の単語は随所に見られるのに対し、藻風訳はそのなかの特定の単語のみを選んで鍵括弧を付しており、この選択基準自体が曖昧である。そのほか、

・大文字＋小頭文字、ないし小頭文字のみの単語であっても鍵括弧を付していない場合――第4歌「モゼスの白き手」the White Hand of Moses, 第21歌「この日」To-day, 第50歌「秘密」the secret.

・原文の二重引用符＋大文字＋小頭文字の組み合わせに鍵括弧を対応させている場合――第58歌「「上下」」“Up-and-down,” 「「あり」」“Is,”「「あらず」」“Is-not.”

・原文の小文字表記の単語に鍵括弧を対応させている場合――第104歌「「書きもの」」manuscript.

・原文が斜体でも鍵括弧を付していない場合――第21歌「明日」*To-morrow*, 第45歌「ありし」*were*,「かはらず」*are*, 第47歌「汝が」*your*, 第66歌「この」*This*, 第78歌「もの」*It*, 第80歌「この」*This*.

(24) 国立国語研究所の『日本語歴史コーパス（CHJ）』〈中納言〉で「ここにして」を検索しても、一件も用例を見出すことができない。藻風は第90歌でも「そこにして」thereと類似の表現を使用している。

(25) 『萬葉集』巻第十一、二四一九「天地と　いふ名の絶えて　あらばこそ　汝と我と　逢ふこと止まめ」（小島憲之・木下正俊・東野治之校注・訳『萬葉集』③、新編日本古典文学全集8、小学館、一九九五年十二月、一八三頁）。ちなみに、藻風訳の対面頁に添えられたジェイムズの挿絵では、詩人の隣に座すのは若い女性なので、詩の「いまし」を女性と取ることが読者にも要請されている。

(26) 「あな」「あはれ」はそれぞれ古典に多くの用例が見られることは言うまでもないが、前掲の『日本語歴史コーパス』で「あなあはれ」を検索すると、古典では『十訓抄』下、第十ノ十四「あくびさしてやあらむ、とおぼゆる声ありて、「あな、あはれ」といひてけり」（浅見和彦校注・訳、新編日本古典文学全集51、小学館、一九九七年十二月、四〇一頁）の一例のみが見出される。藻風はこの言葉を『ヴルレエヌ選集』の「屋根の上なる大空は……」第三聯（一四四頁）「あなあはれ、生はかしこ」Mon Dieu, mon Dieu, la vie est là にも用いている。

(27) 『古事記』中巻・景行天皇「一つ松　人にありせば　大刀佩けましを　衣着せましを　一つ松　吾兄を」（山口佳紀・神野志隆光校注・訳、新編日本古典文学全集1、小学館、一九九七年六月、二三三頁）。

(28) 『萬葉集』巻第二、一三一・一三八「よしゑやし　浦はなくとも　よしゑやし　潟はなくとも」（『萬葉集』①、新編日本古典文学全集6、一九九四年五月、一〇〇、一〇四頁）。

(29) 『源氏物語』桐壺「上も御涙の隙なく流れおはしますを」（阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語』①、新編日本古典文学全集20、小学館、一九九四年三月、二四頁）。

(30) 具体例を、対応する原語（存在しない場合もあり）および歌番号（丸括弧中の算用数字）とともに示す。「やらひたり」Has chased,「ひやうと」（1）、「からくれなゐ」incarnadine（6）、「いづかた」where（9）、「ささがに」Spider,「うつしよ」present Life（14）、「ここもと」about us（15）、「紫摩金の」aureate（16）、「昨日」Yesterday,「ならし」may be（21）、「はしけやし」the loveliset and

the best（22）、「埴生の床」the Couch of Earth（23）、「麗しき」delightful,「あえかなる」lovely（25）、「塵ひぢ」Dust（26）、「兩界」the Two Worlds,「つばらかに」learnedly,「言擧げし」discuss'd（29）、「せちに」eagarly（30）、「およすげぬ」make it grow（31）、「天地」this Universe,「諾否なく」willy-nilly（32）、「無禮」insolence（33）、「透見する」through which … see（35）、「大地」Earth,「葡萄染」Purple（36）、「天地」Universe（37・107）、「埴の甕」earthen Urn（38）、「いくその」How many（39）、「みちのぐ」by the way（40）、「餐」sup（43）、「腕」Arms（44）、「うたかた」Bubbles（47）、「わたつみ」Ocean（48）、「おほわたつみ」Waste（49）、「天地」Creation（52）、「あえかなる」slender,「われかのさまに」（55）、「かはたれに」the Dusk（60）、「たまゆらに」in a trice（61）、「えびかづら」the twisted tendril（63）、「冥府」Hell（66・95）、「ちりひぢ」Dust（81）、「うつそみ」my Being,「あざみ笑へよ」flout（82）、「紫摩金」Pure Gold（85）、「被衣」cover（89）、「體質」Substance（91）、「禮」greet（99）、「いづち」whither（104）。

なお、「葡萄染」および「腕」の歴史的仮名遣いは「えびぞめ」「かひな」なので、戦後の西村書店版では訂正されている。

（31）竹友藻風「『ルバイヤット』訂正に就て」『讀賣新聞』一九二一年四月十四日、第七面。ここでは「瓶つくり」を「門守」に改め、西村書店版ではさらに「擔夫」とする。

（32）西村書店版では第三句を「わがごとき水沫ちよろづ、かの器より」、第四句「サアキ」を「サーキ」と修正し、「注ぎ」とルビを付している。「サアキ」Sáki すなわちアラビア語・ペルシア語の「サーキー」sāqī は酌人を意味する。イギリスの小説家マンロー Hector Hugh Munro（一八七〇—一九一六年）が筆名 Saki をフィッツジェラルド訳から取ったことはよく知られている。Dominic Hibberd, "Munro, Hector Hugh [*pseud.* Saki]," *Oxford Dictionary of National Biography*, in Association with British Academy, from the Earliest Times to the Year 2000, Edited by H. C. Matthew and Brian Harrison, 60 vols., Oxford: Oxford University Press, 2004, Vol. 39, pp. 769–70.

（33）Decker, p. 43. 第三版・第四版との対照は p. 165. ヘロン＝アレンによると、フィッツジェラルド訳の典拠となったのはニコラ版の第百三十七歌であるという。

・*Edward FitzGerald's Rubâ'iyât of Omar Khayyâm, with Their Original Persian Sources*, Collated with His Own MSS., and Literally Translated by Edward Heron-Allen, London: Bernard Quaritch, 1899, pp. 72–73. 本書は以下、Heron-Allen 1899 と略記。

ニコラ訳の後半は「酒の泡の形のごとくに、存在の酒杯のなかで／永遠のサーキーは一千ものハイヤームを見せてくれる」chon shakl-e ḥobāb-e bāde dar jām-e vojūd / sāqi-yē azal hazār kheyyām namūd となっている。Nicolas, pp. 72–73.

（34）『コーラン』第68章1節に「ヌーン。筆にかけて。彼ら（天使）の記録するものにかけて」とあり、これに関する歴史家タバリー Muḥammad 'ibn Jarīr al-Ṭabarī（八三九—九二三年）の注釈には、「神が最初に創造されたのは筆である。神が筆に「書け」と言うと、筆は「神よ、何を書くのですか」と訊ねた。神が「運命（カダル）を書け」と命じたので、筆はその時から復活の日までに存在するはずの事柄を書き記した」という趣旨の伝承が引用されている。*Tafsīr al-Ṭabarī al-Musammā Jāmi' al-Bayān fī Ta'wīl al-Qur'ān*, 15 vols., Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmīya, 2005, Vol. 12, pp. 173–78 (nos. 34530–48).

（35）以下はその例である。

・第33歌三行目「ああ悔ゐよ、天帝の酒をたまひて」Ah, contrite Heav'n endowed us with the Vine:「深く悔いている」意味の形容詞 "contrite" を動詞命令形に訳している。なお「悔ゐよ」の歴史的仮名遣いは「悔いよ」。西村書店版では改められている。

・第85歌一—三行目「力なき「つくられしもの」の中より、／鐵渣の身のわれらに借せしものに代へ／紫摩金をもとむるとや。」

What! from his helpless Creature be repaid / Pure Gold for what he lent us dross-allay'd —:「神が我々に貸し与えた粗悪品（＝贋金）の代わりに、無力な被造物から純金が取り立てられるとは何たることか」の意味で、「粗悪な、不純物を混ぜた」を意味する“dross-allayed”は“what”を説明する補語であろう。だが藻風訳はこれを“us”の同格と誤解している。「鐵渣（をりの）」の歴史的仮名遣いは「おり」が正しく、西村書店版では訂正されている。*Oxford English Dictionary*, Third (Online) Edition, Updated September 2012, allay, v. 3, 1: To mix (a metal) with another; *esp.* to mix (a metal) with a less valuable one or with another substance, so as to lower its standard or quality; to debase.

・第101歌四行目「譽をもひとつの歌と代へにけるかな。」And sold my Reputation for a Song: 直訳はこの通りだが、「二束三文で」「捨て値で」の成句の意味が反映されていない。

・第109歌二行目「われらをながむ」Looks for us, 四行目「眺むらむ」look . . . for:「探し求める」が原義であろう。

(36) 西村書店版も本文は同一だが、「生る」に「うまる」とルビが付され、異体字「瀆」は「瀆」に替えられている。

(37) Decker, p. 46.

(38) ヘロン＝アレンによると、フィッツジェラルド訳の霊感源となったのは、ボドレー図書館所蔵のウーズレー写本第七十五番（ニコラ版百八十二番、ホワインフィールド版百九十七番にほぼ対応）であるという。「私は酒を飲む。そして誰でもが私と同様にそれにふさわしい／私が酒を飲むことなど、彼（神）にとっては瑣事にすぎない／神は太初から私の飲酒をご存じだった／私が酒を飲まないなら、神の知識は無知と化すだろう」mey mī khoram-ō har ke cho man ahl bovad / mey khordan-e man be nazd-e ū sahl bovad / mey khordan-e man ḥaq be-azal mī dānest / gar mey na-khoram ʻelm-e khodā jahl bovad. Heron-Allen 1899, pp. 92–95.

(39) 以下はその例である。

・第16歌三・四行目「埋めて後、人のふたたび堀るといふ／紫摩金（まごん）の土に逢ふべきひとあらず。」Alike to no such aureate Earth are turn'd / As, buried once, Men want dug up again:「逢ふべき」は「變ずべき」are turn'd とでもありたいところ。このままでは意味が理解しがたい。「堀」は西村書店版では「掘」と改められている。

・第78歌一—三行目「またわれら空と呼ぶ覆（かへ）したる鉢、／その下に這ひ入りて生き死ぬものに、／手をあげて、助もとむるなかれ、」And that inverted Bowl we call The Sky, / Whereunder crawling coop'd we live and die, / Lift not your hands to *It* for help:「生き死ぬもの」とは「鉢」を指しているが、このままでは「もの」とは「者」すなわち「生きて死ぬ我々」と誤解されてしまう。

・このほか「散らばへる」strown（第11歌）、「おぢけさし」Scared（第64歌）、「無言（ことなし）」silence（第93歌）のように、やや無理と思われる措辞も散見する。

(40) 第二版第6歌（他の版も番号は同じ）の四行目「青き頬をからくれなゐに染めなして。」That sallow cheek of her's to incarnadine の典拠として『マクベス』第二幕第二場“The multitudinous seas incarnadine / Making the green one red”を挙げ、第二版第26歌（初版第23歌、第三・四版第24歌）の四行目「酒や歌、歌ひめ、——終なきまへに。」Sans Wine, sans Song, sans Singer, and — sans End! は『『御意の儘』第二幕第七場ジャックスの有名な獨白、その思想も「ルバイヤット」に似通ひ、人生を舞臺に例へた言葉の最後に、Sans teeth, sans eyes, sans taste, sans everything (As You Like It. Act II, Sc. VII) とあるのが典據であらう」と記す。西村書店版では後者のみ踏襲されている。

『マクベス』の引用は *Macbeth*, Updated Edition, Edited by A. R. Braunmuller, Cambridge: Cambridge University Press, 2008, p. 162, ll. 65–66, 現代語訳は「見わたすかぎり波また波の大海原を朱に（あけ）

染め、／緑を真紅に一変させるだろう」（小田島雄志訳『シェイクスピア全集』II、白水社、一九七四年五月、三五四頁。『お気に召すまま』の引用は*As You Like It*, Updated Edition, Edited by Michael Hattaway, Cambridge: Cambridge Unicersitty Press, 2009, p. 141, l. 166, 現代語訳は「歯もなく、目もなく、味もなく、なんにもない」（小田島雄志『シェイクスピア全集』IV、白水社、一九七六年十一月、二八八頁）。

(41) 寿岳文章「一冊の書（1）――邦訳ルバーイーヤート」『英語青年』第百十一巻一号、一九六五年一月一日、四頁。この後に、「土居光知教授が、『英語青年』誌上でその訳しぶりを高く評価されたのを、私はいま、きのうのことのようにあざやかに思い出す」とも記す。

(42) 谷沢永一「［私の愛蔵本］オマル・ハイヤーム作『ルバイヤート』邦訳蒐集」『アステイオン』第六号、一九八七年十月、八九頁。谷澤の蒐集した八十二冊は現在、「谷澤永一コレクション」全九十八冊の一環として関西大学図書館に収められている。「［図書館の森］人生を楽しみましょう――谷澤永一コレクション」『関西大学通信』第三百六十四号、二〇〇九年七月十日、第十面。

(43) 西脇順三郎「竹友藻風君を惜む」『英語青年』第百一巻二号、五六頁。のち「竹友藻風君を惜しむ」として、同『あざみの衣』（大修館書店、一九六一年七月）、四五頁、『西脇順三郎全集』第十巻（筑摩書房、一九七三年一月）、二〇二頁に再録。いずれも、漢字は旧字体を新字体に改め、鍵括弧は二重鍵括弧に変更。

(44) 『波斯古詩留盃邪土』の巻末に付された「因縁」に、『ルバイヤート』翻訳を志した動機として、偶然京城の古本屋で見出した「英文學の大家として押も押されもせぬ人」により「大正十年にアルスから出された泰西名詩選の第一編」（四頁）への批判が以下のように記されている。「只單に横の文字を縦に直し、且つルバイヤットの四行詩たることに拘泥して、韻も律も頓とお構ひなく、散文にもならない鴟的文句の綴を勝手放題に四行にぶッ切ってそして見た目だけ詩らしくしようとしたに過ぎぬもの、やうです。（中略）よしんばそのぶッ切りを續けて讀むの忍耐と親切を以てしてからが、其意味たるや何が何やら一向に分らないのです、そのくせ妙な枕詞や雅語なんかちよい〳〵挿んで、それで詩の香でもつけようとする算段か、そのやり方は、徹頭徹尾胡魔化しとしか受取れません」（六頁）。「胡魔化しを急ぐから飛んでもない誤讀まで敢てするやうになるのです」（八―九頁）。

本書は、関西大学図書館所蔵本を閲覧した。戦後再刊された『ルバイヤット――留盃邪土』（叢園叢書第4集、叢園社、一九七二年九月）では、この「因縁」は省略されている。

(45) 一五頁。のちに『法苑林』二五七―五八頁では「波斯」→「ペルシア」、「希臘」→「ギリシア」とし、「その志に於いて或は近きものならむ。（中略）」は省略して読点に代えられた。

(46) 二〇頁。『法苑林』二六二頁では「無慘」を「無慙」に、「ルウキアノス」を「ルーキアノス」に改める。

(47) 『萬葉集』巻第五、八二三「梅の花　散らくはいづく　しかすがに　この城（き）の山に　雪はふりつつ」（『萬葉集』②、新編日本古典文学全集7、一九九五年四月、四三頁）。

(48) *The Greek Anthology*, with an English Translation by W. R. Paton, 5 vols., Cambridge, Mass.: Harvard University Press / London: William Heinemann, 1917–18, Vol. 2, pp. 166–67.

Παῖδά με πενταέτηρον, ἀκηδέα θυμὸν ἔχοντα,
νηλεὴς Ἀΐδης ἤρπασε Καλλίμαχον.
ἀλλά με μὴ κλαίοις· καὶ γὰρ βιότοιο μετέσχον
παύρου, καὶ παύρων τῶν βιότοιο κακῶν.

直訳は「悲しみのない心を持った五歳の子供である私／カッリマコスを無慈悲なハーデース（死者の国の神）が奪い去った／だが私のことを嘆いてはならぬ。なぜなら私は人生のうちの／

わずかだけ、そして人生の悪のわずかだけにしか与らなかったから」。韻律上はダクチュロス（— ∪∪の長短短格。ただしスポンデーすなわち— —の長長格に置換可能な場所がある）の六歩格と五歩格の二行連句（distichon）が繰り返されるエレゲイア。五歩格の第三詩脚に休止（caesura）がある。原詩には標題はなし。ルキアノスLūkiānos（一二〇年頃—一八〇年以降歿）はユーフラテス川上流、西岸の町サモサタSamosata（現トルコ共和国のサムサトSamsat）出身の散文作家として知られる。呉茂一（一八九七—一九七七年）の『花冠——呉茂一譯詩集』（紀伊國屋書店、一九七三年四月）、六〇頁の訳は以下の通り。

この僕、五つになつて心に何の
　わづらひも知らぬ子供の
カルリマコスを　情もない冥府の王が
　連れてつてしまつたの。
でも僕のため泣いてくれなくても
　いいのさ、世の中に少しか
居なかつたかはり、世間の悪さも
　すこしきり受けなかつたもの。

(49) *Amaranth and Asphodel: Poems from the Greek Anthology*, Done into English Verse by A. J. Butler, Oxford: Basil Blackwell, 1922, p. 243. 弱強五歩格。本書は竹友文庫蔵。

(50) 『希臘詞花抄』二七—二八頁。『法苑林』二六九—七〇頁では、「プラトオン」→「プラトーン」、「ニュンフェ」→「ニュムペー」とする。

(51) 『源氏物語』桐壺「常に参らまほしく、なづさひ見たてまつらばやとおぼえたまふ」（阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『源氏物語』①、四三頁）。

(52) 『古事記』上巻・大国主神「栲綱の　白き腕　沫雪の　若やる胸を」（山口佳紀・神野志隆光校注・訳、八七—八八頁）。

(53) 『希臘詞花抄』一九頁、『法苑林』二六一頁

(54) *The Greek Anthology*, with an English Translation by W. R. Paton, Vol. 3, pp. 442–43; *Further Greek Epigrams*, Edited by D. L. Page, Cambridge: Cambridge University Press, 1981, pp. 174–75. 以下は前者による原文。

Σιγάτω λάσιον Δρυάδων λέπας, οἵ τ' ἀπὸ πέτρας
　κρουνοί, καὶ βλητὴ πουλυμυγὴς τοκάδων,
αὐτὸς ἐπεὶ σύριγγι μελίζεται εὐκελάδῳ Πάν,
　ὑγρὸν ἰεὶς ζευκτῶν χεῖλος ὑπὲρ καλάμων·
αἱ δὲ πέριξ θαλεροῖσι χορὸν ποσὶν ἐστήσαντο
　Ὑδριάδες Νύμφαι, Νύμφαι Ἀμαδριάδες.

直訳は「ドリュアス（樹木の精）たちの緑豊かな巌や、岩蔭から湧き出す／泉、それに仔を産んだばかりの雌羊の混乱した鳴き声は沈黙するがいい。／なぜなら牧神（パーン）自らが、連ねた葦の上にその柔らかな唇を滑らせて／甘美なシュリンクス（葦笛）を奏で、／周囲では、ヒュドリアス（水の精）のニンフとハマドリュアス（樹木の精）のニンフたちが／軽やかな足取りで踊りを披露しているからだ」。

ペイジ校訂版では三行目の“μελίζεται”を“μελίσδεται”とし、六行目は“Ὑδριάδες,”“Ἀμαδριάδες”の冒頭を小文字表記にする（固有名詞とは取らない）などの異同がある。

詩型は前出作品と同様のエレゲイアで、三行目の“μελίζεται εὐκελάδῳ”の部分は“αι εὐ”と母音接続（hiatus）が生じるため、“αι”は韻律上短母音化（correptio）される。

(55) *Amaranth and Asphodel: Poems from the Greek Anthology*, pp. 190–91. 訳詩は弱強五歩格。原詩三行目“μελίζεται”は“μελίσδεται”の形で提示する。

(56) この訳詩集については、以下に詳しい紹介があり、呉茂一訳との比較対照も試みられている。

・富士川英郎「竹友藻風『希臘詞花抄』――訳詩ものがたり(八)」『海』第十四巻八号、一九八二年八月、一四二―四七頁。のち、同『黒い風琴――譯詩ものがたり』小澤書店、一九八四年四月、一四三―五七頁。

(57) 「Rubaiyat of Omar Khayyam『ルベェアット評釋』」『英語の日本』第九巻十九號、一九一六年十月十五日、五七八頁。第二回、二十號（十一月一日）、六一二頁。第三回、二十一號（十一月十五日）、六四三頁。第四回、二十二號（十二月一日）、六七四頁。第五回、第十卷二號（一九一七年一月十五日）、四四頁。第六回、四號（二月十五日）、一〇六―〇七頁。第七回、五號（三月一日）、一四三頁。第八回、八號（四月十五日）、二二七頁。第九回、十號（五月十五日）、二八八頁。第十回、十一號（六月一日）、三二六頁。第十一回、十二號（六月十五日）、三五六頁。第十二回、第十一卷二號（七月十五日）、三八頁。第十三回、三號（八月一日）、七一頁。第十四回、四號（八月十五日）、一〇一頁。第十五回、七號（十月一日）、一七八頁。

(58) 大正二年九月九月三十日調『神戸高等商業學校一覽』（一九一三年十月）九二頁では、担当は「英語」で学位は「バチエラー、オフ、アーツ（オベリン大學）／マスター、オフ、アーツ（ハーヴアード大學）」となっている。その後、昭和三年四月調の『神戸高等商業學校一覽』（一九二八年五月）までに、「修身」「研究指導（商工心理）」などの担当が順次加わった。一九一二年四月創設の關西學院高等學部商科でも当初から講師として英語を担当している。『開校四十年記念　関西學院史』関西學院史編纂委員編、一九二九年九月、九〇―九一頁。『関西学院百年史　一八八九―一九八九』資料編1、関西学院、一九九四年三月、一二八頁。

(59) 記号類ではダッシュ、ハイフン、カンマ、セミコロン、感嘆符、二重引用符、アポストロフィなどが正確に再現されず、揚音符（á, í, ú の類の鋭アクセント記号）は第51歌の “Má to Máhi” 以外すべて省略されている。表記上も斜体や小頭文字はまったく無視され、単語冒頭の大文字も小文字で置き換えられている箇所が見られる。

(60) 第4歌四行目 “forth” ← “out,” 第10歌二行目 “fluster” ← “bluster,” 第18歌二行目 “Iamshyd” ← “Jamshyd,” 第26歌四行目 “Moths” ← “Mouths,” 第48歌三行目 “reached” ← “reach’d,” 第50歌二行目 “Aliff” ← “Alif,” 第51歌四行目 “The” ← “They,” 第53歌二行目 “Heavn’s” ← “Heav’n’s.”

(61) 連載第四回の本文では、“Sultán,” “Mahmúd” の揚音符は脱落している。

(62) Heron-Allen 1899, pp. 22–25.

(63) 「大正日本」二〇頁注（23）。注釈者の小川自身は、連載第十五回の第60歌への「註」において「Mahmud はペルシヤの王にて印度の黒人之を征服せる人なり」と、フィッツジェラルド注に基づいて説明している。

(64) いくつか例を示す。
・第2歌・第3歌「覇宿（ママ）」「羈宿」Tavern →「酒屋」（第58歌では「酒舗」と訳す）。
・第15歌「薔薇の如き紅き土」aureate Earth →「金色の土」。
・第17歌「柱」Portals →「扉」。

(65) 以下はその例である。
・第31歌の「註」で「サターンの神即ち農業殖產の神」とするのは、一神教の体系下では不適切。
・第32歌の後半「暫時が間人互に汝と呼び吾れと答ふ／而かもしばらくにして吾れも汝も存するなし」Some little talk awhile of Me and Thee / There was — and then no more of Thee and Me（連載第八回の本文では小頭文字はすべて小文字に変更）では、「汝」と「吾れ」は人間相互の区別と解釈されているが、これは絶対者（神）と被造物（人間）とを指すと考えるのが一般的。フィッツジェラルドの注にも “Me-and-Thee: some dividual

Existence or Personality distinct from the Whole" とある。Decker, p. 112.

・第42歌後半「少くも汝は昨日ありし如くに今日ある事と／又明日も今日以下に成りくだる事の無るべきを思へ」Think then you are TODAY what YESTERDAY / You were — TOMORROW you shall not be less（連載第十一回の本文では小頭文字はすべて小文字に変更）。「註」では「尙此の事だけは樂し得て餘りあるべし卽ち吾人は今日も亦昨日吾人がありたるが如きものであり且つ明日と雖今日以下の者と成り下る事のなかるべきを、（中略）以上の決心を以て猶ほ天命に安んじ得べき筈なり」と記すが、対応する初版第47歌では「汝は生きている限り、やがて行き着くもの——無——にすぎず／それ以下にもならぬことを思うがいい」Then fancy while Thou art, Thou art but what / Thou shalt be — Nothing — Thou shalt not be less (Decker, p. 163) とあって、無常観に基づく諦念を詠んでいると思われるので、「天命に安んずるといった発想とはやや異なるであろう。

(66) 寿岳文章「一冊の書（1）——邦訳ルバーイーヤート」五頁。

(67) 『The Later Nineteenth Century Poets（英詩集）』Edited with Biographical and Explanatory Notes by T. Kuriyagawa and K. Yano, 大阪・積善館、一九二二年三月、pp. 124–36. フィッツジェラルドの歌番号は記されていないが、全体を五部に分けている。選ばれているのは次の通り、全百一歌中の六十五歌。第Ⅰ部＝第12—16歌。第Ⅱ部＝第17—29歌。第Ⅲ部＝第39—74歌。第Ⅳ部＝第91—99歌。第Ⅴ部＝第100—101歌。

選択に当たっては、クウィラー＝クーチ Arthur Quiller-Couch（一八六三—一九四四年）の『オックスフォード版英詩集』*The Oxford Book of English Verse 1250–1900*（Oxford: The Clarendon Press, 1900, no. 698: From Omar Khayyám）を参考にしているように思われる。同詩集所載の歌はすべて（第12—15歌、第17—24歌、第91歌、第100—101歌）選ばれ、部の分け方にも対応が見られる。

本稿の「附表」に示す通り、第四版と第五版で異同のある箇所については、基本的には第五版、一部で第四版の本文に従っている。

(68) 「大正日本」二三頁注（50）。クラークには詳細なフィッツジェラルド論がある。Ead(sic)ward Clarke, "Edward FitzGerald, With Special Reference to "Omar Khayyam" (Lecture Delivered before the Tokyo Literary and Musical Society)," *The Japan Weekly Mail*, Vol. LIX, No. 22, May 31st, 1913, Supplement, pp. I–VII.

(69) 「明治日本」六頁。

(70) 「厨川白村」『近代文学研究叢書』第二十二巻、昭和女子大学、一九六四年十二月、二九三頁。

(71) 矢野峰人「［私のコレクション］オーマー・カイヤムの翻訳」『日本古書通信』第二十六巻二号、一九六一年二月、二頁。のち、『矢野峰人選集』1（エッセイ・詩・訳詩）、国書刊行会、二〇〇七年六月、三六七頁。

(72) 「矢野峰人年譜」『矢野峰人選集』3（英文学）、国書刊行会、二〇〇七年十一月、六八一頁。

(73) 前注（10）参照。フィッツジェラルド訳第19歌の注（p. 126）に、ホワインフィールド版の第百四歌の訳を（Whinfield's version of Omar, st. XXI として）引いているが、対訳版とは歌番号が異なるので、白村の用いたのは以下の版であることが判る。

・*Quatrains of Omar Khayyám*, Translated by E. H. Whinfield, London: Kegan Paul Trench Trubner & Co. Ltd., 1920.

本書は英訳三百九十五首を "Complaints," "Sceptical and Rebellious," "Carpe Diem," "Mystical and Religious," "Love Poems," "Satires," "Didactic and Gnomic" の七つの主題に分けて排列している。

(74) *The Strophes of Omar Khayyám*, Translated from the Persian by John Leslie Garner, with an Introduction and Notes, Milwaukee: The Corbitt & Skidmore Co., 1888. 一八九八年に第二版が *The Stanzas*

of Omar Khayyám として刊行されている。

(75) 前注（9）に既出。フィッツジェラルド訳第15歌の注（p. 125）に、同書一五八頁から引用している。

(76) 第17歌 "Caravanserai" に対する李白（七〇一―六二年）の「春夜宴桃李園序」、第20歌 "this reviving Herb" に対する白居易（七七二―八四六年）の諷喩詩「續古詩十首」の第二、第九―十二句。

(77) 第47歌 "the long while" ← "the long, long while," 第49歌 "that the spangle" ← "that spangle," 第53歌 "when You shall" ← "You when shall," 第54歌 "Waste not your Hour in the vain pursuit" ← "Waste not your Hour, nor in the vain pursuit." そのほか、韻律の関係で綴り字を省略してアポストロフィになっている箇所を、本来の綴り字に戻している場合、ないしはその逆がきわめて多い。例えば、第22歌一行目 "lov'd" ← "loved," 第26歌一行目 "discussed" ← "discuss'd," 四行目 "scattered" ← "scatter'd" の類。

(78) 第13歌一行目＝セミコロンをカンマに変更して表記。第25歌一―三行目＝末尾のカンマが脱落、二行目＝"that" の直後に余計なカンマが挿入される。第40歌二行目＝末尾のカンマが脱落。第43歌一行目＝"So" の直後に余計なカンマを挿入。三行目＝"And" の直後のカンマが脱落。第47歌二行目＝"Oh" の直後のカンマが脱落。第49歌二行目＝末尾の感嘆符が脱落。第51歌二行目＝セミコロンが脱落。四行目＝セミコロンがピリオドに変化。第57歌二行目＝"reckoning" の直後の疑問符が脱落。第58歌二行目＝末尾に余計なカンマを追加。第59歌四行目＝コロンがピリオドに変化。第62歌二行目、第64歌一・三行目、第66歌一行目、第67歌一行目、第70歌一行目＝末尾のカンマが脱落。第73歌二行目＝コロンが感嘆符に変化。第93歌二行目＝コロンがセミコロンに変化。第96歌三行目＝末尾のカンマが脱落。

(79) 第21歌一行目 "Belovèd" ← "Belovéd," 第25歌三行目 "Muezzin" ← "Muezzín," 第45歌二・三行目 "Sultan" ← "Sultán," 第46歌三行目 "Sáki" ← "Sáki," 第98歌一行目 "winged" ← "wingéd."

以上のうち、第21歌は『オックスフォード版英詩集』の誤記を踏襲している。

(80) 第42歌四行目 "To-Morrow" ← "To-morrow," 第48歌三行目 "lo" ← "Lo," 第49歌二行目 "The Secret" ← "the secret," 第70歌四行目 "He knows — He knows" ← "he knows — HE knows," 第96歌二行目 "Manuscript" ← "manuscript." そのほか、余計な空白を入れている例として、第45歌一行目 "'T is" ← "'Tis," 第57歌三行目 "'T was" ← "'Twas," 第58歌 "'t was" ← "'twas."

(81) 新村出「厨川博士の追憶より鎌倉懐古へ（オーマル・カイヤムの四行詩篇の事など）」、同『典籍叢談』岡書院、一九二五年九月、一二〇―二一頁。初出は「追憶より懐古へ」『藝文』第十四年十一號、一九二三年十一月、三九―四〇頁（「學生某君」→「學生の某君」とする）。のち、『新村出全集』第八巻（書誌典籍篇 I）、筑摩書房、一九七二年一月、八〇―八一頁。漢字は新字体を使用し、「四行詩篇（ルバイヤット）」は「『四行詩篇（ルバイヤット）』」と表記。

(82) 文部省文化庁監修『重要文化財』23（書跡・典籍・古文書 VI）、毎日新聞社、一九七七年九月、五八頁「83 南番文字」。文化庁監修『国宝・重要文化財大全』8（書跡・下巻）、毎日新聞社、一九九九年十二月、六〇九頁「113 南番文字」、同別巻（所有者別総合目録・名称総索引・統計資料）、二〇〇〇年七月、一九五頁。山田長左衛門・山田永年を経て、山田光子蔵。

(83) 羽田の経歴や業績については、例えば以下に詳しい。

・間野英二「［東洋学の系譜　11］羽田亨」『月刊しにか』第二巻二号、一九九一年二月、一〇〇―〇五頁。のち、江上波夫編『東洋学の系譜』大修館書店、一九九二年十一月、二二五―三六頁。

・羽田正「羽田亨」、今谷明・大濱徹也・尾形勇・樺山紘一編『20世紀の歴史家たち（2）』日本編・下、刀水書房、一九九九年十一月、一五一―六二頁。

(84) 羽田亨「日本に傳はれる波斯文に就て」『研究會史學講演集』第三册、冨山房、一九一〇年九月、一四九—六六頁。改訂版は、「日本に傳はれる波斯文に就て」『羽田博士史學論文集』下卷（言語・宗教篇）、東洋史研究會、一九五八年十一月、二〇六—一四頁。新村は慶政上人に関する情報を提供し、羽田の「京都の學界に於ける處女講演」であるこの講演会にも出席した。それから四十四年後の一九五三年三月七日、京都國立博物館で羽田が再び「慶政上人と南蠻文字」と題する「ほとんど最後の講演」を行なったときにも新村は聴講に訪れたという。神田喜一郎「羽田先生の想ひ出」、同『敦煌學五十年』二玄社、一九六〇年五月、一五一—五六頁。のち『神田喜一郎全集』第九卷（墨林閒話・敦煌學五十年）、同朋舎出版、一九八四年十月、四二三—二九頁。

(85) John Richardson, *A Dictionary, Persian, Arabic, and English: To Which is Prefixed a Dissertation on the Languages, Literature, and Manners of Eastern Nations*, Oxford: The Clarendon Press, 1777.

(86) 羽田亨「南番文字文書解說」神田喜一郎『敦煌學五十年』一五四—五五頁のあいだの別刷図版（『神田喜一郎全集』第九卷、四二六頁）。手書き文字なので字体は一定しないが、便宜上旧字体に統一した。

(87) 以下に代表的な論考を挙げる。
- Paul Pelliot, avec des notes de MM. Ch. Huart et Denison Ross, “Les plus anciens monuments de l’écriture arabe en Chine,” *Journal Asiatique*, juillet-août 1913, pp. 177–91.
- 前嶋信次「泉州の波斯人と蒲壽庚」『史學』第二十五卷三號、一九五二年三月、一—六六頁。のち、同『東西文化交流の諸相』同刊行会、一九七一年三月、三五〇—四〇二頁。
- 荻野三七彦「［研究ノート］「波斯文」文書と勝月坊慶政」『古文書研究』第二十一号、一九八三年六月、五三—五九頁。
- 足利惇氏「西アジア文明と日本文明との関係」、伊藤義教・井本英一編『足利惇氏著作集』第一巻（イラン学）、東海大学出版会、一九八八年二月、六〇七—三〇頁。一九七六年、コペンハーゲン大学における講演録。六三〇頁に、「ペルシア語詩の読解は井本英一の協力により旧稿を大きく一新することができた」と伊藤義教により付記されている。

(88) Emiko Okada, “Beyt-ī az Vīs va Rāmīn dar sanad-ī Zhāponī,” *Āyande*, Vol. 15, 1989, pp. 7–11; Eadem, “Sokhan-ī dīgar dar bāzshenāsī-ye beyt-ī az Vīs va Rāmīn: Dar kohantarīn neveshte-ye fārsī-ye bāzmānde dar zhāpon,” *Majalle-ye Īrān-shenāsī*, Vol. 1, No. 1, Spring 1989, pp. 70–75. 筆者よりこれらの抜き刷りの恵投に与ったことを感謝ととも記しておきたい。

(89) Tsuneo Kuroyanagi, “E‘teqād-e Ferdowsī be sar-neveshte dar Shāhnāme,” *Rāhnamā-ye Ketāb*, Vol. 20, Nos. 8–10, 1977/78, pp. 570–80; 黒柳恒男「わが国に伝わるペルシア詩について」『蒲生禮一先生記念論集』東京外国語大学・蒲生禮一先生十回忌記念刊行会、一九八七年七月、二一二—二三頁。

(90) Fakhr al-Dīn As‘ad Gurgānī, *Vīs va Rāmīn*, ed. Moḥammad Rowshan, Tehran: Ṣodā-ye Mo‘āṣer, 2010, p. 270: 81. Nāme-ye panjom andar jafā bordan az dūst, l. 16; 岡田恵美子訳『ヴィースとラーミーン——ペルシアの恋の物語』平凡社、一九九〇年四月、三九五頁「77愛の手紙——その五」（岡田訳は底本が別なので、章番号と章題も異なっている）。「喜びの世」jahān-ē khorramī → 「麗しの春」bahār-ē nīkvī、「天」falak → 「世」jahān と、慶政文書とのあいだには異同がある。韻律は Hazaj-e Mosaddas-e Maḥḏūf.

(91) Firdawsī, *Shāh-nāma*, ed. E. E. Bertels et al., 9 vols., Moskva: Izdatel’stvo Vostochnoj Literatury, 1960–71, Vol. 6, p. 298, l. 1294. ただし「人には」be-mardom → 「世界には」be-gīti と異同がある。韻律は Motaqāreb-e Moṯhamman-e Maḥḏūf.

(92) 『羽田博士史學論文集』所収の改訂版の訓みに従い、現代音によるローマ字転写を付した。四十八年前の『研究會史學講演集』初出では、第一行を “gar dar ajal-am mosāmehat khāhad būd”（もしわが

寿命に寛大さがあるならば)、第三行を "iākin khelāf [gar] gardad-īn [charkh-e] kabūd" (もしこの青い空が敵対者となるのなら) と解読している ([ ] 内は羽田による補い) が、この訓みでは第三行は韻律に合わない。山田永年に与えた「南番文字文書解説」の和訳は、むしろ改訂版の訓みを反映しているようである。なお、足利惇氏前掲論文、六三〇頁もほぼこの通り読み解いている。

(93) 黒柳恒男「わが国に伝わるペルシア詩について」二二二頁。

(94) 黒柳は論考執筆時に「講演集を未だ見る機会に恵まれない」(二二三頁) と記しているので、自らの提案が羽田の最初の訓みと同一であることは知りえなかったであろう。

(95) Emko Okada, "Sokhan-ī dīgar," p. 73, n. 5.

(96) 古文書学の荻野三七彦 (一九〇四—九二年) が前注 (87) の論考中で、ハイヤームの「詩を比較検討してみて、「波斯文」の四行詩とは思想の矛盾は見られない」、「これをこのままに、オマル・ハイヤームの『ルバイヤート』の中に挿入してみても彼の作詩と認めてよさそうである」(五六頁) と述べたのに対し、黒柳恒男がこれを「きわめて大胆な提言」(二二三頁) として専門の立場から批判したのは当然のことである。

(97) 新村出「波斯詩を誦して堀井君を偲ぶ」『社會及國家』第二百七十二號 (堀井梁歩氏追悼)、一九三八年十二月、九—一一頁。のち「波斯詩を誦して堀井梁歩君を偲ぶ」と改題して、同『ちぎれ雲』甲鳥書林、一九四二年九月、一一七—一一一頁。『新村出全集』第十二巻 (随筆篇II)、筑摩書房、一九七三年三月、二〇六—〇八頁。堀井梁歩『ルバイヤット——異本留盃邪土』南北書園、一九四七年五月、一二五—三一頁。

『典籍叢談』所収の追悼文を読んだ堀井は、面識のなかった新村に「その文獻の考證の本文を見たいといふ希望を間接に申入れ」、新村は「羽田博士の論文の出てゐる史學研究會講演集第三册などを指示して其便に供したと共に、同博士に乞ふて原本直寫の寫眞のコピーを尋ねなどして其の複製を試みる承諾をも得た」という。それらの資料を検討した成果が、以下の論考に記されている。

・堀井金太郎「日本に於ける「ルバイヤット」の書誌」『讀書』第一卷第三號、朝鮮讀書聯盟、一九三七年五月、一二—一五頁。のち、堀井梁歩「日本に於ける『ルバイヤット』の書誌」として、同『ルバイヤット——異本留盃邪土』一〇五—二〇頁。ただし細部に異同あり (以下の引用は初出により、丸括弧内は引用者の補足を示す)。

ここに堀井は「南番文字」の写真版を挿入し、「新村博士の慫慂(ママ)により厨川白村博士が一通りしらべられた結果、どうもオマールカイヤムのものではないようだ(ママ)といはれたさうです。それならば私も一つ鑑定して貰はうと早速波斯語の權威城大 (京城帝國大學) の松本 (重彦) 教授に持つて行つて讀んで貰ひました。所が何分八百年も經つてゐる古文書で摺れたりなんかしてると見え點の所在がハツキリしないので判然とはよめないといふお話でした。が言葉に洒落のある所を見るとオマールよりも寧ろハフイズ (ハーフィズ Hāfiẓ) に近いともいはれました」と記す。

松本重彦(しげひこ)(一八八七—一九六九年) は東京帝國大學文科大學史學科 (國史學專攻) 卒業、一九二二年八月に大阪外國語專門學校 (のちの大阪外国語大学) 教授となり、同年九月より一九二四年十二月までベルリンへ留学、アラビア語を学ぶ。帰国後の一九二五年四月同校でアラビア語を担当。一九二九年七月に京城帝國大學法文學部教授。松本はペルシア語を専門としていたわけではないので、堀井が彼に鑑定を依頼したのはいささか的外れであったろう。松本の履歴については、以下を参照した。

・「松本重彦先生略年譜」『中央大學文學部紀要』第九号 (史学科第三号：松本・鳥山両先生古稀記念特集号)、一九五七年九月、一七七頁。

・前嶋信次「イスラム研究ブームことはじめ——先次大戦末ま

での思い出」『日本とアラブ――思い出の記』再版・合冊版、日本アラブ関係国際共同研究国内委員会事務局／「日本・中東イスラーム関係の再構築」研究会、二〇〇二年八月、三―四頁。

・Osamu Ikeda, "Arabic Teaching in Japan," *Arab-Japanese Relations: Tokyo Symposium*, Japan National Committee for the Study of Arab Japanese Relations Liaison Office, 1980, pp. 76–77.

「重彦」の訓みは、直接面識のあった前嶋の回想に従って「しげはる」としておく。

堀井は自らの翻訳『波斯古詩留盃邪士』を臺灣の矢野峰人に寄贈したことが機縁となって、有名な『ルバイヤート』蒐集家のポッター Ambrose George Potter（一八六五―一九五二年）と文通するようになり、この「南番文字」の写真版入りの論考を彼にも送付したらしい。（おそらく一九三七年）六月二十二日付けのポッター返信の相場信太郎による邦訳が、堀井梁歩『ルバイヤット――異本留盃邪士』一二一―一二三頁に「書簡より」として収められており、その一節には「御送附の雑誌を英國博物館の權威者に托した所、挿入の寫眞の四行詩は、確かにオマールのものであると斷定されました。然し、フイツゼラルドの飜譯と同一のものではないと云はれました」とある。この判断を下した「權威者」が誰を指すのかは不明である。

(98) 矢野峰人「RUBAIYAT の研究」（FITZGERALD の生涯）、『英語青年』第五十四巻二號、一九二五年十月十五日、三九―四一頁。第二回（第1歌）、三號、十一月一日、六九―七〇頁。第三回（第2・3歌）、四號、十一月十五日、一〇三―〇四頁。第四回（第4―7歌）、五號、十二月一日、一三一―三二頁。第五回（第8―10歌）、六號、十二月十五日、一六八―六九頁。第六回（第11・12歌）、七號、一九二六年一月一日、二〇八頁。第七回（第13・14歌）、八號、一月十五日、二二八頁。第八回（第15―17歌）、九號、二月一日、二七〇―七一頁。第九回（第18―20歌）、十號、二月十五日、三〇三―〇四頁。第十回（第21―23歌）、十一號、三月一日、三四三頁。第十一回（第24・25歌）、十二號、三月十五日、三七七頁。第十二回（第26―28歌）、第五十五巻一號、四月一日、一六頁。第十三回（第29―31歌）、三號、五月一日、七九―八〇頁。第十四回（第32・33歌）、四號、五月十五日、一一七頁。

この間、第五十四巻十二號に掲載された清水起正「Keep the Courts その他」（三九四頁）の批評に答える形で、第五十五巻二號に「清水起正氏に答ふ」（六〇―六一頁）が掲載されたので、連載は一回休みになっている。

(99) 「矢野峰人年譜」『矢野峰人選集』3、六八一頁。

(100) 本文は「IV. Edward FitzGerald: The Rubaiyat」二三―二九頁。注釈は「IV. Omar's Rubaiyat」七五―一四二頁。

(101) 本書はポッターに捧げられている。「自序」は以下のように記す。

> 倫敦に在る同好の友 POTTER 氏齡漸く傾きて心境稍寂しく、わが再遊を促がす事頗る切なるものあり。さはれ我等相見ゆるの機、また何時の日にか來ん。思うて（ママ）暗愁を禁じ得ず。今敢へてこの未完の拙譯を集め部數を限りて上木する所以のものは、遙にこの老友の寂寥を慰めんがために他ならざるなり。

本文はその後、『矢野峰人譯詩集　黒き獵人』（臺北・大木書房、一九四三年九月）、九三―一二七頁に「オオマア・カイヤアム」として収録。さらに『矢野峰人選集』1、六四七―五一頁、オマル・カイヤーム／矢野峰人訳『ルバイヤート集成』（国書刊行会、二〇〇五年一月）、一八五―二一九頁に再録。

これとは別に、フィッツジェラルド訳初版に基づく七十五首の訳を「波斯四行詩集」と題して『媽祖』第三巻三・四號（一九三七年十二月、七―二二頁および三八年三月、七―三五頁）に

掲載後、奥瑪開儼作／矢野峰人譯『四行詩集』（臺北・日孝山房、一九三八年五月）として私家版で上梓している。こちらも『ルバイヤート集成』三―七九頁に再録。

（102）矢野は英国留学中にポッターにも会って情報を交換し、稀覯本の入手に努めている。矢野峰人「Partial Portraits XIII. A. G. Potter（1–2）」『英語青年』第六十三巻四・五號、一九三〇年五月十五日・六月一日、一一二―一三頁、一五〇―五一頁。のち、「オオマアの蒐集家ポッタア」として同『片影』（研究社、一九三一年九月）一五二―六二頁、「ポッタアの片影」として『矢野峰人選集』1、三五六―六一頁に再録。

矢野の蒐集した和書四十七冊、洋書百七十八冊の合計二百二十五冊は一九六〇年七月、「オマル・ハイヤーム文庫」として昭和女子大学図書館に寄贈された。その後、各方面からの寄贈や図書館による購入の結果、二〇一七年九月現在での点数は三百五点に達している。以下、矢野峰人の項の書誌情報では、オマル・ハイヤーム文庫（矢野寄贈分）所蔵本についてはその旨付記する。

（103）第一回、四〇頁。Heron-Allen は前注（6）、Batson は前注（9）に既出。いずれもオマル・ハイヤーム文庫所収。

（104）矢野峰人「清水起正氏に答ふ」六一頁。ドールの集注版の書誌は以下の通り。

・*Multi-Variorum Edition, Rubáiyát of Omar Khayyám*, English, French, German, Italian, and Danish Translations Comparatively Arranged in Accordance with the Text of Edward FitzGerald's Version, with Further Selections, Notes, Biographies, Bibliographical, and Other Material, Edited by Nathan Haskell Dole, 2 vols., Illustrated, Boston: L. C. Page and Company (Incorporated) / London: Macmillan & Co., Limited, 1898. オマル・ハイヤーム文庫蔵。

（105）第五版について、バットソン注釈本の本文（矢印の直後）と矢野が提示する本文（矢印の手前）との異同を挙げる。なお、矢野の本文はほぼバットソン注釈本に従っているものの、後者の引用符（‘　’）は第28歌四行目を除いてすべて二重引用符（“　”）に置き換えられている。一九三五年の三省堂版では、二三―二九頁に別途第五版本文（以下①と表示）が提示され、多くの誤記が修正されているが、七五―一四二頁に復元された『英語青年』掲載の本文と注釈（以下②と表示）では、誤記はほとんどそのままになっている。例外は以下の丸括弧内に付記する。

・第1歌四行目　“Sultan’s” ← “Sultán’s”.

・第4歌三行目　“WHITE HAND OF MOSES” ← “WHITE HAND OF MOSES”.

・第5歌二行目　“Jamshyd’s Seven-ring’d” ← “Jamshýd’s Sev’n-ring’d”.

・第6歌二行目　“Péhlevi” ← “Pehlevi”.

・第8歌二行目　“The” ← “the”. 三行目 “drop.” ← “drop,” （末尾はカンマ）。

・第9歌一行目　“morn” ← “Morn”. 四行目 “Jamshyd” ← “Jamshýd”, “Kaikobad” ← “Kaikobád”.

・第10歌四行目　“Hatim” ← “Hátim”.

・第12歌二行目　“wine” ← “Wine” （三省堂版②も修正）。

・第13歌一行目　“this” ← “This”.

・第15歌一行目　“Grain” ← “grain”. 二行目 “Winds” ← “winds.”

・第16歌四行目　“Hour” ← “hour”.

・第18歌二行目　“deep;” ← “deep:” （末尾はコロン）。

・第21歌二行目　“To-day” ← “TO-DAY”. 三行目 “To-morrow” ← “*To-morrow*”. （三省堂版①も未修正）。

・第23歌二行目　“and, Summer” ← “and Summmer”.

・第25歌三行目　“Muezzin” ← “Muezzín”.

・第32歌三行目　“Me and Thee” ← “ME and THEE”. 四行目 “Thee and Me” ← “THEE and ME”. （三省堂版①も未修正）。

（106）注釈のなかで実際に引用がなされている書籍についてのみ、

言語別に書誌情報を掲げておく。とくに注記がない限り、オマル・ハイヤーム文庫蔵。

① 英語

・［Burnet］ *The Rubaiyat of Omar, M. P.*, by W. Hodgson Burnet, Illustrated by T. C. Black, London: WM. Collins Sons & Co. Ltd., 1921. ＊パロディー版。

・［Garner］ *The Stanzas of Omar Khayyam*, Translated from the Persian by John Leslie Garner, Second Edition, London: George Bell and Sons, 1898. ＊オマル・ハイヤーム文庫には、前注（74）で挙げた一八八八年版も収めるが、矢野の引用と一致するのは一八九八年版の方である。

・［Le Galienne］ *Rubáiyát of Omar Khayyám, A Paraphrase from Several Literal Translations*, by Richard Le Galienne, London: Grant Richards, 1897.

・［McCarthy］ *Rubaiyat of Omar Khayyam*, Translated by Justin Huntley McCarthy, London: David Nutt, 1889. ＊片野文吉訳の底本。

・［Shrubsole］ *The Quatrains of Omar Khayyám*, A New Translation, by O. A. Shrubsole, London: E. Marlborough & Co., 1920.

・［Whinfield］ *The Quatrains of Omar Khayyám*, Translated into English Verse by E. H. Whinfield, London: Trübner & Co., 1882. ＊全二百五十三首の韻文訳。原詩の韻字による排列。

・［Whinfield］ *The Quatrains of Omar Khayyám*, The Persian Text with an English Verse Translation by E. H. Whinfield, Second Edition, Corrected and Enlarged, London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., Limited, 1901. ＊全五百八首。オマル・ハイヤーム文庫欠。フィッツジェラルド第28歌の【註】に引く Whinfield 訳はこの版（第三百五十三歌）のみと一致する。

・［Whinfield］ *Quatrains of Omar Khayyám*, 1920. ＊前注（73）参照。オマル・ハイヤーム文庫欠。

・［Whitney］ Omar Khayyam, *The Rubaiyat*, Newly Paraphrased by Ruel William Whitney, with Slight Foreword by C. C. M. Jr., ［Cleveland］: Privately Printed, 1903.

・［Wheeler］ *The Golden Treasury of the Best Songs and Lyrical Poems in the English Language*, Selected and Arranged by Francis Turner Palgrave with Additional Poems, and with Notes by C. B. Wheeler, London: Oxford University Press, 1921. ＊フィッツジェラルド訳初版七十五歌とそれに対する注を収録。オマル・ハイヤーム文庫には一九一四年初刊（標題末を with Additional Poems to the Present Day とする）の一九四九年増刷本を収む。これには同一の注を含むが、Wheeler の名前は記載されず、“Preface to the Notes” の末尾に C.B.W. の署名のみ残る。

② フランス語

・［Anet］ *Les 144 quatrains d'Omar Khayyam*, traduits littéralement par Claude Anet & Mirza Muhammad, Paris: Éditions de la Sirène, 1920.

・［Hallard］ *Omar Kheyyám*, traduit en vers français d'après la célèbre version anglaise de FitzGerald, par James Henry Hallard, London: Rivingtons, 1912. ＊フィッツジェラルド第四版の仏訳。

・［Jules de Marthold］ *Rubaiyât d'Omar kháyyâm*, mis en rimes françaises d'après le manuscript d'Oxford, par Jules de Marthold, Paris & Bruxelles: Charles Carrington, 1910. ＊オマル・ハイヤーム文庫欠。

・［Roger-Cornaz］ Omar Khayyám, *Les rubáiyát*, traduction nouvelle, par F. Roger-Cornaz, Paris: Librairie Payot et Cie, 1916. ＊フィッツジェラルド初版の仏訳。オマル・ハイヤーム文庫欠。

③ イタリア語

・［Mario Chini］ *Rubâiyât di Omar Khayyâm*, secondo la lezione di Edoardo FitzGerald, Traduz. di Mario Chini, Lanciano: Carabba Editore, 1919［1907, 1916］. ＊第四版の伊訳。

④中国語

・『魯拜集』莪默・伽亞漠著／郭沫若譯、辛夷小叢書第四種、上海・創造社、一九二四年一月。＊第四版の英語・中国語対訳。オマル・ハイヤーム文庫に欠。元来は「波斯詩人莪默伽亞謨」（第一　讀 Rubaiyat 後之感想、第二　詩人莪默伽亞謨、第三 Rubaiyat 之重譯）として『創造』第一卷三期（一九二二年十一月、雑録一―四一頁）に発表した「第三　Rubaiyat 之重譯」部分。第一・第二はのち、郭沫若『文藝論集』（上海光華書局、一九二五年。一九三〇年八月五版、二一七―三七頁）および『郭沫若全集』文学編第十五巻（三叶集・文藝論集、人民文学出版社、一九九〇年七月、二九三―三〇八頁）に収録される。訳詩は戦後、上海・建文書店、上海・新文藝出版社を経て、一九五六年七月に北京の人民文学出版社より新版が出されている。

(107) それぞれ「大正日本」七頁、一二頁以下。

(108) 矢野峰人「清水起正氏に答ふ」六〇頁。

(109) 吉川幸次郎『論語』上、新訂中国古典選2、朝日新聞社、一九六五年十二月、一六〇―六一頁。原文は総ルビ。

(110) 前注（17）参照。

(111) Heron-Allen 1908, p. 31.

(112) 第5歌「王」Jamshyd, 第6歌「神代の言葉」Péhlevi, 第9歌「皇（すめ）（らぎ）」Jamshyd and Kaikobad, 第10歌「すめらぎの／みおやもみこも」Kaikobád the Great, or Kaikhosrú, 第11歌「王」Mahmúd, 第18歌「王者」Jamshýd, 「王侯」Bahrám, 第19歌「帝王」Caesar. 矢野の引く原文がバットソン注釈版本文と異なる場合も、そのままの形を掲げた。

(113) Heron-Allen 1908, p. 25.

(114) 例えば第1歌「朝彦」the Sun, 第9歌「岩隠る」take . . . away, 第24歌「ちりひぢ」the Dust, 「美酒（うま）（き）」（対応する原語欠）、第26歌「あさむ」Scorn, 第29歌「何地（いづち）より」*Whence*.

(115) オマル・ハイヤーム作／小川亮作譯『ルバイヤート』岩波文庫、一九四九年一月、「解説」一五八頁。

(116) その事績については、「高田半峰」（『近代文学研究叢書』第四十三巻、昭和女子大学近代文化研究所、一九七六年七月、二〇九―八五頁）に詳しい。

(117) 『高田早苗博士大講演集』大日本雄辯會講談社、一九二七年八月、二二九―五七頁。原文は総ルビ。初出は「欧米漫遊中の宗教雑感」として『早稲田講演』第五巻二號、一九一五年二月、七〇―九〇頁、および『早稲田學報』第二百四十號、一九一五年二月、二―一〇頁。いずれもルビなし。単行本では講演を「大正四年一月」とする。初出の二つの雑誌記事相互、ならびにそれらと単行本とのあいだには異同が見られるが、逐一の注記は省略し、以下の引用は単行本によって、本文中の丸括弧内に頁番号を付記する。

なお、「歸一教會」は一九一二年六月、宗教・道徳の研究と諸宗教の相互理解・協力の推進を目的として澁澤榮一・姉崎正治らによって設立された団体。一九四二年十二月の解散まで、毎月例会を開催し、会報を発行した。例会における主な講演者と題目は以下を参照。園田孝編「日本自由宗教運動の回顧と展望――今岡信一良の求道の生涯を通して」『歩み続ける自由宗教――今岡信一良先生追悼』東京帰一教会、一九九三年四月、二五六―五八頁。

(118) 引用は必ずしも正確ではない。二行目“arguments”←“argument”（複数のsは不要）、三行目“about,”←“about:”（カンマではなくコロン使用）、“ever more”←“evermore”（スペース不要）、四行目“wherein”←“where in”（スペースが必要）など。なお、初版・第二版では四行目“where”が“as”になるなどの異同がある。Decker, p. 148.

(119) 引用は原文とかなりの異同がある。一行目“Yesterday This day's madness”←“YESTERDAY *This* Day's Madness”（小頭文字、斜体、

冒頭大文字使用)、“prepare”→“prepare;”(末尾のセミコロン欠)、二行目“Tomorrow's”→“To-Morrow's”(小頭文字使用。第五版はMも小頭文字)、“Triumph”→“Triumph,”(カンマ欠)、“Despair?”→“Despair:”(疑問符ではなくコロン使用)、三行目“came”→“came,”(カンマ欠)、“why;”→“why:”(セミコロンではなくコロン使用)。Decker, p. 198.

(120) 引用文中の「昨日」のルビの歴史的仮名遣いは「きのふ」とあるべきところ。

(121) 初出誌のうち『早稲田學報』では疑問符ではなくセミコロンを使用。

(122) 吉川幸次郎『論語』上、四四—四五頁。

(123) 嘉内「打てば響く(小説)」『【新】校本　宮澤賢治全集』第十六巻(上)補遺・資料、補遺・資料篇、筑摩書房、一九九九年四月、二六二—六五頁。

(124) 菅原千恵子『宮澤賢治の青春——〝ただ一人の友〟保阪嘉内をめぐって』角川文庫、一九九七年十一月、四七頁。本書の親本は宝島社より一九九四年八月に刊行されているが、増補改訂されている箇所があるので引用には文庫版を利用する。

(125) 本来の本文との異同は以下の通り。一行目“the sky”→“The Sky”(単語冒頭は大文字表記)、二行目“whereunder”→“Where-under”(単語冒頭は大文字表記)、三行目“Life”→“Lift”(動詞命令形)、“It”→“It”(斜体)、“help,”→“help—”(カンマではなくダッシュ使用)、“it”→“It”(単語冒頭は大文字表記)、四行目“I”→“I.”(末尾のピリオド欠。第二版(第78歌)、第三・四版(第72歌)では、“coop'i”→“coop'd”と綴り、“Thou”→“you”に変えるなどの異同があるので、引用は初版によると判断できる。Decker, p. 196.

(126) 本来の本文との異同は以下の通り。“fate”→“Fate”(単語冒頭は大文字表記)、“scheme”→“Scheme”(単語冒頭は大文字表記)。第二版(第108歌)では“thou”→“you”に、第三・四版(第99歌)ではさらに“Fate”→“Him”と変化するので、引用は初版と判断できる。Decker, p. 226.

(127) 菅原千恵子前掲書、五三頁。

(128) 『【新】校本　宮澤賢治全集』第三巻(詩Ⅱ)、筑摩書房、一九九六年二月、本文篇=一六八—七〇頁、校異篇=四〇三—〇九頁。原稿には「一九二五、一、一八、」の日付がある。

(129) 『【新】校本　宮澤賢治全集』第四巻(詩Ⅲ)、筑摩書房、一九九五年十月、本文篇=六六、一四五頁、校異篇=一二八—三三頁、二四九—五一頁。「〔うすく濁った浅葱の水が〕」には「一九二七、四、一八、」の日付がある。

(130) 金子民雄「春と修羅　第二集」に見る西域」『「春と修羅」第二集　研究』宮沢賢治学会イーハトーブセンター／思潮社、一九九八年三月、二三三—三五頁。同『ルバイヤートの謎——ペルシア詩が誘う考古の世界』集英社新書、二〇一六年五月、一四二—四八頁。

(131) *The Golden Treasury of the Best Songs and Lyrical Poems in the English Language*, Selected and Arranged with Notes by Francis Turner Palgrave, Together with One Hundred Additional Poems (To the End of the Nineteenth Century), London: Oxford University Press, 1912 [1907]. pp. 341–54, Additional Poems, no. 318: Rubaiyát of Omar Khayyám of Náishápúr. ノの「補遺詩篇」を含む版は一九一四年に新版が出され、そちらには no. 319: Rubáiyát of Omar Khayyám of Náishápúr として収録された。前注(106)①参照。

(132) 徳富健次郎・徳富愛『日本から日本へ』東の巻、金尾文淵堂、一九二一年三月、一八一頁。原文は横組み。引用にさいし、横組み用のカンマは和文用読点(、)に変更した。のち、徳富健次郎『日本から日本へ』第一巻、蘆花全集第十二巻、蘆花全集刊行會、一九二九年一月、一七四頁。縦組み、パラルビ。

(133) 『日本から日本へ』一八一—八二頁。引用にさいし、横組み用の二重引用符(“　”)は縦組み用(〝　〟)に変更。蘆花全集、一

七四頁。パラルビ。“Arabian Night” には「アラビヤン　ナイト」、“Sindbad” には「シンドバッド」とルビを付し、「「老人」と鍵括弧を使用。二点リーダー（‥）は三点リーダー（…）に変更。

(134) 『日本から日本へ』一八二頁。蘆花全集、一七五頁はパラルビで、“Fitzgerald” には「フイツツゲラルド」、「波斯」には「ぺるしや」、“Omar Khayyam” には「オーマル　カイヤム」とルビを付す。“Fillthecup” は “Fill the cup” と誤植を訂正、詩の引用には「吾が愛人よ盃をみたせ／そは過去の悔と未來の怖を消すなり／明日？明日余は過去の幾千年をも含む／昨日と共にあらんのみ。」と和訳を添えている。

(135) 第二版から第四版までは “Regrets” → “Regret” と単数形（第五版は複数形に戻る）にし、二行目のダッシュはコロンに、三行目の疑問符は感嘆符に変更。Decker, p. 139.

(136) 開成館編輯所編『New Life Readers』全五巻、開成館、一九二二年十月、第四巻、Lesson 29: Thoughts for the New Year (p. 147) に “Pass, therefore, not to-day in vain, / For it will never come again (Omar Khayyam)” とある。この句はハイヤームの作品として人口に膾炙するが、実際には典拠不明である。

(137) ［各社近着外國映畫紹介］「天幕造師オマー」『キネマ旬報』第百五十九號、一九二四年五月十一日、九頁。川添利基・菅省三編『泰西近代映畫劇精通』聚芳閣、一九二四年十一月、二〇〇―〇二頁「オーマー」。『舶来キネマ作品辞典――日本で戦前に上映された外国映画一覧』世界映画史研究会編、全四冊、科学書院／霞ヶ関出版、一九九七年七月、第Ⅲ分冊、二〇一一頁［FR-1152I］。梗概は、“Illustrated Screen Report: Omar the Tentmaker,” *Exhibitor's Trade Review*, Vol. 13, No. 5, December 30, 1922, p. 278.

(138) Decker, pp. 3–4（初版）。以下、この逸話は第二版から第五版まで、ティムール朝の歴史家ミール・ハーンド Mīr-khānd（一四九八年歿）の著作を利用したフィッツジェラルドの友人カウエル Edward Byles Cowell（一八二六―一九〇三年）の匿名の雑誌論文からの引用として掲げられている。
・“Omar Khayyám, the Astronomer-Poet of Persia,” *Calcutta Review*, Vol. 30, No. 59, March 1858, pp. 149–62.

(139) Edward G. Browne, *A Literary History of Persia*, Vol. 2, Cambridge: Cambridge University Press, 1928, pp. 190–93, 252–54. 黒柳恒男『ペルシアの詩人たち』オリエント選書2、東京新聞出版局、一九八〇年六月、一〇八―〇九頁。

(140) 「オーマー」『キネマ旬報』第百六十號、一九二四年五月二十一日、六頁。

(141) ［主要外國映畫批評］飯島正「ペルシャの暴君」『キネマ旬報』第百六十三號、六月二十一日、二二頁。

(142) 「カイヤムよ」『詩集　砂の枕』第一書房、一九二六年二月、一四四頁。のち、『堀口大學全集』1（詩集）、小澤書店、一九八二年一月、一六一―六二頁。「薔薇」の訓みの歴史的仮名遣いは「しやうび」なので、『全集』では修正されている。

(143) ［各社近着外國映畫紹介］「愛人の誓」『キネマ旬報』第二百十六號、一九二六年一月二十一日、三八―三九頁。「愛人の誓」『活動倶樂部』第九卷二號、一九二六年二月、六〇―六三頁。『舶来キネマ作品辞典』第Ⅰ分冊、九頁［FP-00047］。

(144) 「古典愛詩劇　愛人の誓」『キネマ旬報』第二百十九號、一九二六年二月二十一日、二六頁。

(145) ［主要外國映畫批評］木村千疋男「愛人の誓」『キネマ旬報』第二百二十三號、一九二六年四月一日、四九頁。「崇」は「崇」の誤植で、「おがむ」と読ませるのであろう。

(146) 「古典愛詩劇　愛人の誓」二七頁。

(147) *Salámán and Absál: An Allegory*, Translated from the Persian of Jámi, London: J. W. Parker and Son, 1856, Frontiepiece.

(148) *Salámán and Absál*, p. 25.

(149) *Salámán and Absál*, Appendix, pp. 77–78.

(150) William Ouseley, *Travels in Various Countries of the East, More*

Particularly Persia, 3 vols., London: Rodwell and Martin, 1819–23, Vol. 1, Appendix No. VI: Persian Game of Chugán, pp. 345–55, Plate XXII. 図版の下辺には“Persian Picture, See p. 352”と筆記体のキャプションが付されている。

(151) *Dīvān-e Ḥāfiẓ*, ed. Parvīn Nātel Khānlarī, Second Edition, 2 vols., Tehran: Khārazmī, 1983, Vol. 1, p. 780, no. 362. 全十一対句中の第六対句後半。韻律は Ramal-e Moṯhamman-e Maḥḏhūf. ウーズレーの訳は “Welcome to the *meidán*, thou chief of horsemen! strike the ball !”

なお、黒柳恒男訳『ハーフィズ詩集』(平凡社東洋文庫、一九七六年十二月)では底本が異なるため、「名騎手よ、競技場に入ったら球を打て」(二八五頁)と訳されている。*Dīvān-e Khwāje Shams al-Dīn Muḥammad Ḥāfiẓ-e Shīrāzī*, ed. Moḥammad Qazvīnī and Qāsem Ghanī, Tehran: Zavvār, 1989, p. 269, no. 390: khosh → chon.

(152) *Rubáiyát of Omar Khayyám and the Salámán and Absál of Jámí*, Rendered into English Verse, Bernard Quaritch, 1879, Frontcepiece. フィッツジェラルドの解説は Appendix, pp. 110–11 (The Royal Game of Chúgán) に、一八五六年の『サラーマーンとアブサール』訳に付した解説を簡略化する形で付されている。

(153) 前注(9)参照。

(154) 『地上巡禮』創刊號から第壹卷第三號まで、奥付頁に付された「正規」冒頭の文言の一部。ちなみに、創刊號には矢野禾積も詩「小曲」を寄稿している(『矢野峰人全集』3の「矢野峰人著作年譜」には欠)。

[謝辞]

大阪大学総合図書館「竹友文庫」の蔵書目録は、筆者の照会に応じて参考調査主担当専門職員の井上直子氏がご提供下さり、詳細を知ることができた。また、昭和女子大学図書館「オマル・ハイヤーム文庫」については、同館の前之園香世子氏が目録を閲覧できるようホームページを整備し、文庫の利用にも便宜を図って下さった。記して厚く御礼申し上げたい。

[付記]

旧稿「大正日本」において小林愛雄『近代詞華集』所収「酒」の訳詩を紹介したさいに不明であった初出は以下の通りである。

・小林愛雄「近英詞華——酒(フイッツゼラルド譯オマア・カイヤムの『ルバイヤット』より)」『帝國文學』第十四卷第五、一九〇八年五月、三八—三九頁。

附表　フィッツジェラルド訳第四版・第五版の異同一覧

歌	行	第四版	第五版			厨川・矢野 1922	矢野 1925–26	矢野 1929	備考
			a	b	c				
1	1	Sun	Sun,			—	Sun,	Sun,	
5	2	Jamshyd		Jamshýd		—	Jamshyd	Jamshyd	
6	4	her's	hers			—	hers	hers	
9	4	away	awa	away		—	away	away	
		Jamshyd		Jamshýd	Jamshyd	—	Jamshyd	Jamshyd	
16	4	was	is			is	is	is	
17	4	destin'd	destined			destin'd	destined	destined	
18	2	Jamshyd		Jamshýd	Jamshyd	Jamshyd	Jamshýd	Jamshyd	
21	2	Regret	Regrets			Regrets	Regrets	Regrets	
		future		Future	future	future	Future	Future	
24	3	Dust, to	Dust to			Dust to	Dust to	Dust to	
		lie,		lie	lie,	lie,	lie	lie,	
35	1	Lip		lip		—	—	lip	
43	1	the Angel	that Angel			the Angel	—	that Angel	*
44	3	Wer't	Were't			Wer't	—	Were't	
		wer't	were't			wer't	—	were't	
48	3	reacht	reach'd			reach'd	—	reach'd	
49	4	does	may			may	—	may	*
56	1	Line,	Line			Line,	—	Line	
67	2	fire	fire,			fire,	—	fire	
	4	emerg'd	emerged			emerged	—	emerged	
68	3	illumin'd	illumined			illumined	—	illumined	
74	2	To-Morrow's	To-morrow's			To-morrow's	—	To-morrow's	
75	4	predestin'd	predestined			—	—	predestined	
76	2	Being		being		—	—	being	
79	3	we	he			—	—	he	
80	3	Predestin'd	Predestined			—	—	Predestined	
84	2	My	"My	My		—	—	My	
	3	And	"And	And		—	—	And	
	4	Or	"Or	Or		—	—	Or	
93	3	Cup,		Cup	Cup,	Cup,	—	Cup	
98	1	wingéd			winged	wingèd	—	winged	
101	1	Sákí			Sáki	Sáki	—	Saki	
末尾		TAMÁM.	TAMAM.	TAMÁM		—	—	TAMÁM.	

1)「第五版」欄には，注 (9) で示した以下の刊本の本文を示す。

a: *Letters and Literary Remains of Edward FitzGerald*, Edited by William Aldis Wright, 3 vols., Vol. 3, London and New York: Macmillan and Co., 1889.

b: *Rubáiyát of Omar Khayyám, The Astronomer-Poet of Persia*, Rendered into English Verse, London: Macmillan and Co., Limited / New York: The Macmillan Company, 1899.

c: *Letters & Literary Remains of Edward FitzGerald*, 7 vols., Vol. 7, London: Macmillan and Co., Limited / New York: The Macmillan Company, 1903.

・表には示していないが，第四版および第五版 a では，引用が前行から続く場合に行頭に二重引用符 (“) を置いているのに対し，b ではこれらを削除し，c ではさらにすべての二重引用符を通常の引用符 (‘　’) に置き換えている。

・Heron-Allen 1899 (注 33) および『オックスフォード版英詩集』(注 67) の本文は a に依拠している。

・バットソン注釈版 (注 9) の本文はおおむね b を基本とするが，b の二重引用符はすべて通常の引用符 (‘　’) に置き換えているほか，以下のような細かな異同がある。

第 1 歌 1 行目 “For” は “for” と小文字表記，第 66 歌 4 行目 “answer’d” の直後にカンマ追加，第 70 歌 4 行目 “— HE knows” を “— HE knows” と大文字表記，第 88 歌 4 行目 “and ’t will” を “and ’twill” と詰めて表記，第 89 歌 1 行目 “Let” を “let” と小文字表記。

2)「厨川・矢野 1922」「矢野 1925–26」「矢野 1929」は，それぞれ以下の本文を示す。

・厨川辰夫・矢野禾積『The Later Nineteenth Century Poets (英詩集)』大阪・積善館，1922 年 3 月 (注 67)。

・矢野峰人「RUBAIYAT の研究」『英語青年』第 54 巻 2 號–第 55 巻 4 號，1925 年 10 月 15 日–1926 年 5 月 15 日 (注 98)。

・矢野禾積『Rubáiyát of Omar Khayyám (ルーバイヤアート)』研究社小英文學叢書，研究社出版，1929 年 10 月。収録された第一版と第四版の本文のうち後者を使用。

3)「備考」欄の＊印は，訳者フィッツジェラルド自身が第四版手沢本に残した修正であることを示す。

4) 第四版と第五版 a との対照表は，つとに福田博『四行詩集彷徨——ルバイヤート詩書集成』(書肆ひやね，2008 年 3 月)，84 頁に示されているので，ここではそれをもとに，さらに同じマクミラン書店の 1899・1903 年版の刊本と日本の教科書版の本文の情報を追加した。